

Departmental Bulletin Paper / 紀要論文

グリム童話と日本の昔話の比較：グリム童話に登場する Teufel の像と日本の昔話に登場する鬼の像

Ein Vergleich der Märchen der Brüder Grimm mit den japanischen Märchen über Teufel und ,Oni ‘

太田, 伸広

Ohta, Nobuhiro

人文論叢：三重大学人文学部文化学科研究紀要. 2010, 27, p. 59-95.

<http://hdl.handle.net/10076/11328>

グリム童話と日本の昔話の比較

— グリム童話に登場する Teufel の像と日本の昔話に登場する鬼の像 —

Ein Vergleich der Märchen der Brüder Grimm mit den japanischen Märchen über Teufel und ,Oni'

太 田 伸 広

要旨：鬼には角や牙、爪があつたりするが、Teufel はない。馬の足が Teufel の印である。鬼の色は赤が基本で、青、黒、白だが、Teufel は黒色しかいない。鬼は女の鬼がいるが、Teufel に女はない。鬼は大きく力強い大人（鬼女は年寄りも）であるが、Teufel は大男はおらず、年寄りで小人のイメージが強い。鬼は腕力が強く、頭が弱いが、Teufel には超人的な知識を持つものも数々いる。鬼は打出の小槌や万里車、飛び蓑、隠れ蓑、生き鞭、死に鞭、宝物など夢ある物を持ち、それらが人間の手に渡り、人々に幸福をもたらすが、Teufel の持ち物はお金しかない。鬼は人間の生活圏に現れることが多いが、Teufel が人家に現れる事はない。鬼の住処は山、鬼が島、鬼の家、穴、天井、地獄などであるが、Teufel はほぼすべて地獄に住む。Teufel は金をちらつかせ、貧しい者に接近し、契約を結び、魂を奪おうとする。こんな鬼は一匹もいない。Teufel は悪人の魂を奪い、地獄に落とすことで、善人を救い、悪人を罰す神の役割をも果たしている。こんな鬼もいない。鬼は女を渋い、妻にし、子をもうけたりするが、そんな Teufel はいない。鬼は人を食うし、食う場面もあるが、Teufel は人を食うと想像させるものが一匹いるだけで、原則人を食わない。Teufel は神の対概念で、神に反対し神と闘うが、鬼が神や仏の対概念であることはない。結じて、鬼は人間的で地上的で非宗教的であるが、Teufel は超人間的、地下的、来世的、キリスト教的な存在である。

はじめに

グリム童話の Teufel は、悪魔と訳されたり、鬼と訳されたりしている。悪魔であれ、鬼であれ、その日本語からわれわれ日本人がイメージするものと Teufel の実像と一致しているのであろうか。とりわけ Teufel と鬼は違うように思われる。でもこれは印象に過ぎない。実際のところはどうなのか。グリム童話の Teufel も日本昔話の鬼も、これまでにその実像が十分に明らかにされてきたとは言えない。そこで、グリム童話に登場する Teufel の像と日本昔話に登場する鬼の像をまず明らかにすることにしたい。本稿では、グリム童話に登場する Teufel と『日本の昔ばなし』、『日本昔話大成』に登場する鬼をすべて取り上げ、テキストに即して分析し、Teufel と鬼の実像を明らかにすることにする。この像は、当然のことながら、Teufel と鬼の哲学的概念とも宗教的概念とも異なる。これから明らかにしようとするものは、あくまでグリム童話に登場する Teufel の像と日本の昔話に登場する鬼の像である。

分析の対象は、グリム童話の場合は、BRÜDER GRIMM Kinder- und Hausmärchen

Vollständige Ausgabe Mit 184 Illustrationen zeitgenössischer Künstler und einem Nachwort von Heinz Rölleke Artemis & Winkler 1949 Winkler Verlag, München, 19. Auflage 1999 であり、日本の昔話の場合は、関敬吾氏編集の『日本の昔ばなし』（岩波文庫）第Ⅰ、第Ⅱ、第Ⅲ巻の240話と関敬吾氏編集の『日本昔話大成』（角川書店）の全10巻の内10,190話である。これは『日本昔話大成』に収められた全昔話の数ではない。それは『日本昔話大成』に収録された全昔話の中から、分析の対象としてふさわしくない断片や未完の類話などを省いた数である。しかし、これら10,190話の中にも、『日本の昔ばなし』に収められた昔ばなしの類話が非常に数多く含まれているので、『日本昔話大成』は、鬼の実像をできるだけ完全な形で明らかにするための材料として用いることにする。

グリム童話で、参考にした訳は、金田鬼一氏訳の『グリム童話集』（岩波書店）である。

第1章 グリム童話に描かれている Teufel の像

これから、グリム童話に出てくる Teufel と Teufel の描写をすべて取り上げ、分析することにする。Teufel が登場するグリム童話をすべて列挙すると、『KHM 29 3本の黄金の髪の毛の生えた Teufel』、『KHM 31 手なし娘』、『KHM 43 トルーデおばさん』、『KHM 44 洗礼立会人の死神』、『KHM 55 ルンペルシュティルツヘン』、『KHM 59 フリーダーとカーターリースヘン』、『KHM 61 小農民』、『KHM 68 泥棒とその師匠』、『KHM 81 ひょうきん者』、『KHM 82 賭博師ハンス』、『KHM 92 黄金の山の王様』、『KHM 100 Teufel の煤だらけの兄弟』、『KHM 101 熊皮男』、『KHM 119 7人のシュヴァーベン人』、『KHM 120 3人の修行中の職人』、『KHM 121 怖いもの知らずの王子』、『KHM 125 Teufel とそのおばあさん』、『KHM 148 主の動物と Teufel の動物』、『KHM 189 農民と Teufel』、『KHM 195 土まんじゅう』そして『鍛冶屋と Teufel』の21篇である。この内『泥棒とその師匠』では、Teufel ではなく、外来語の *Düvel* が使われており、『黄金の山の王様』では、ein schwarzes Männchen は Teufel ではなく、der Schwarze と呼ばれている。しかし、それらは Teufel そのものなので、参考として取り上げたい。それから、両者（後者は最後の場面）と『トルーデおばさん』、『ルンペルシュティルツヘン』、『フリーダーとカーターリースヘン』、『小農民』、『7人のシュヴァーベン人』の6つのメルヘンでは、Teufel は言葉だけで、登場人物ではない。最後に『鍛冶屋と Teufel』は KHM ではないが、Teufel についての描写が非常に詳しく、よくまとまった話であるので、参考として取り上げることにする。

第1番目は『3本の黄金の髪の毛の生えた Teufel』である。このメルヘンで王様は *wer meine Tochter haben will, der muß mir aus der Hölle drei goldene Haare von dem Haupte des Teufels holen;* と言う。だから Teufel は地獄に住んでおり、黄金の髪の毛をしてる。では、Teufel のいる地獄はどこにあり、どのようなものなのであろうか。幸運の星の下に生まれた子が地獄に行った時の描写は次のとおりである。「*Als er über das Wasser hinüber war, so fand er den Eingang zur Hölle. Es war schwarz und rußig darin, und der Teufel war nicht zu Haus, aber seine Ellermutter saß da in einem breiten Sorgenstuhl.*」、「*Sie (die Ellermutter) sah aber gar nicht so böse aus.*」、「*Sie verwandelte ihn in eine Ameise*」、「*und (die Alte) gab dem Glückskind die menschliche Gestalt zurück.*」これらから、Teufel の住む地獄の入り口は川の向こう岸にあること、地獄の中は真っ黒で、煤だらけであること、Teufel にはおばあさんがいること、

Teufel のおばあさんは悪人に見えなかったこと、また実際に悪人でなかったこと、しかし人間を蟻に変えたり、また人間に戻したりする魔法を使うことができるということが分る。

Teufel そのものの叙述は以下のとおりである。Wenn der Teufel heim kommt und findet dich, so geht dirs an den Kragen; このように Teufel は理由もなく人を殺す。また 'Ich rieche rieche Menschenfleisch,' という Teufel の言葉とか、Immer hast du Menschenfleisch in der Nase! という Teufel のおばあさんの言葉から、Teufel は人を食べそうである。そして Als er gegessen und getrunken hatte, war er müde, legte der Ellermutter seinen Kopf in den Schoß und sagte sie sollte ihn ein wenig lausen. というように、Teufel は飲み食いし、しらみがいる。それから、warum ein Brunnen, aus dem sonst Wein quoll, trocken geworden ist, jetzt nicht einmal mehr Wasser gibt: warum ein Baum, der sonst goldene Äpfel trug, nicht einmal mehr Laub treibt: und warum ein Fährmann immer herüber- und hinüberfahren muß und nicht abgelöst wird. というような、人間ではとても分らない問題にも、Teufel はいとも簡単に答える。Teufel は物知りである。最後に、so ließ sie (die Ellermutter) den alten Drachen (= den Teufel) in Ruhe, と Teufel は年老いた竜と呼ばれている。

第2番目は『手なし娘』である。貧乏になった粉屋が薪を取りに森に行った時、老人 (Teufel) が ich will dich reich machen, wenn du mir versprichst, was hinter deiner Mühle steht. と言った。粉屋が約束し、家に帰ってみると、箱や物入れがお金 (Reichtum) で一杯になっていた。ところが、水車の後ろに立っていたのは信心深い娘であった。3年後に der Böse=der Teufel が現れ、娘を連れて行こうとした。しかし、娘が wusch sie sich rein und machte mit Kreide einen Kranz um sich. すると、der Teufel は娘に近づけなかった。Am andern Morgen kam der Teufel wieder, aber sie hatte auf ihre Hände geweint, und sie waren ganz rein. Da konnte er ihr wiederum nicht nahen und sprach wütend zu dem Müller 'hau ihr die Hände ab, sonst kann ich ihr nichts anhaben.' と、翌日も Teufel は娘の両手が涙できれいだったので、娘をどうすることもできず、激怒し娘の両手を切れと言う。粉屋が拒むと、der Böse はお前自身を連れて行くと言って脅す。娘は父親のことを案じ、父親に手を差し出す。父親に両手を切られた娘が激しく泣き、清らかだったので、Teufel はあきらめ、娘に対する権利をすべて放棄する。

旅に出た娘は、王様に見初められ結婚し、男の子を産んだ。母親は、戦争にかけた王様にそのことを知らせようと、使いの者に手紙を持たせて、送り出した。ところが Da kam der Teufel, welcher der frommen Königin immer zu schaden trachtete, und vertauschte den Brief mit einem andern, darin stand, daß die Königin einen Wechselbalg zur Welt gebracht hätte. と、Teufel はその手紙をすり替える。取替え子が生まれたことを知り、王様は衝撃を受けるが、自分が帰るまで、お后を大事に世話をするようにとの返事を持たせた。ところが Da kam der Teufel abermals und legte ihm einen andern Brief in die Tasche, darin stand, sie sollten die Königin mit ihrem Kinde töten. と、Teufel は后を子供と一緒に殺せという手紙にすり替える。手紙を読んだお母様は驚くが、お后様と孫に同情し、彼らを密かに逃がしてやる。逃げたお后様は天使に守られて暮す。妻と子供を捜しにかけた王様は、7年ほど飲まず食わずに広く世界を探しまわるが、神様が生き延びさせてくれる。そして后と子供を見つけ、婚礼をやり直す。その上、神様はお后様の手も生やしてくださった。

第3番目は『洗礼立会人の死神』である。ある貧しい男が洗礼立会人を探しにかけた。Da

trat der Teufel zu ihm und sprach 'was suchst du? Willst du mich zum Paten deines Kindes nehmen, so will ich ihm Gold die Hülle und Fülle und alle Lust der Welt dazu geben.' Der Mann fragte 'wer bist du?' 'Ich bin der Teufel.' 'So begehr ich dich nicht zum Gevatter,' sprach der Mann, 'du betrügst und verführst die Menschen.' このように、Teufel を洗礼立会人にするなら、Teufel は子供に金貨を山ほどくれるし、さらに世の中の快楽をすべて味わわせてくれる。しかし、Teufel は、一般に「人間を騙したり、堕落させたり（誤った道に誘惑したり）する」か、あるいは、そうするように思われている。

第4番目は『ルンペルシュティルツヘン』である。このメルヘンでは、小人が、わかるはずがないと思っていた自分の名前をお后様に言い当てられると、「Teufel が教えやがったな」と叫びながら、自分で自分の体を二つに裂いてしまう。小人の名前は小人そのものであるが故、Teufel は人知の及ばぬ秘密、物事の本質を知っているとみなすことができる。

第5番目は『ひょうきん者』である。ここでは、豪壮なお城の中に、neun häßliche Teufel が現れる。ここに入った者で、生きて帰った者はまだないのであるから、Teufel は人を殺すのであろう。また Teufel たちは、ひょうきん者のまわりを輪になって踊り、醜い足で顔を踏みつけようしたり、背後から髪の毛をつかみ、引っ張ったり、乱暴を働く。ひょうきん者はこの Teufel たちを Teufelsgespenster と呼び、宿屋の主人とお城の主は die Geister と呼んでいる。この後、ひょうきん者は Teufel を背囊の中へ入れて、鍛冶屋に鎧で殴り殺してもらった。その際、Teufel たちは、哀れな悲鳴を上げた。生き残った一人の Teufel はまた地獄へ帰って行った。このように Teufel は地獄に住んでいる。地獄の前には、大きな黒い門があり、Teufel が番をしている。そこには、Teufel の親分 (der Oberste) がいる。

第6番目は『賭博師ハンス』である。ハンスが地獄の門へ行くと、地獄へ入れてくれた。そこには、us de olti Luzifar und krumpn Tuifln (die g'roden hobn af de Welt z'toan g'hot) と、「地獄の王様」と背中の曲がった Tuifln がいた。背中のまっすぐな Tuifln は「人間の世界で働いていた。」そしてハンスは賭博で「地獄の王様」に勝ち、彼から家来の Tuifln を取り上げてしまう。

第7番目は『Teufel の煤だらけの兄弟』である。退役した兵隊さんが生きていく糧もなく森に入って行った。その森の中で、兵隊さんは小さな小人の老人 (Teufel) に出くわした。Teufel は、7年間従僕として仕えれば、一生涯お金持ちにしてやると言う。しかし、体を洗ったり、髪をといたり、髭を刈ったり、爪や髪を切ったり、涙を拭いてはならないということであった。そして Teufel は兵隊さんを地獄へ連れて行った。地獄での仕事は、極悪人を入れた釜の火を焚き、家をきれいにし、ごみを掃いて戸の後ろに運び、すべてきちんと整理整頓することであった。しかし、釜の中を覗くことは御法度であった。地獄の中では、釜が円形状に置かれてあった。ところが、兵隊さんは釜を覗いてしまった。それが Teufel にばれたが、兵隊さんが釜に薪をくべたので命拾いをした。7年の奉公を終えた兵隊さんがもらった報酬はといえば、掃き寄せていたごみ屑であった。ところが、兵隊さんが地上の森へ帰ってみると、背囊の中に入っていたごみ屑は純金に変わっていた。ところが、その黄金の入った背囊を宿屋の主人に盗まれた。兵隊さんが地獄へ行って Teufel に窮状を訴えると、Teufel は兵隊さんの体をきれいにしてくれ、宿屋の主人が盗んだ純金を返さなければ、Teufel がみずから出かけて行って、地獄へ引き連れて行くと言え、と言った。こうして兵隊さんは宿屋の主人から金の背囊を取り返した。また、Hans machte Musik, denn das hatte er beim Teufel in der Hölle gelernt. と

あるように、Teufel は音楽が得意なのである。

第 8 番目は『熊皮男』である。Er (der Soldat) kam auf eine große Heide, auf der nichts zu sehen war als ein Ring von Bäumen: darunter setzte er sich ganz traurig nieder und sann über sein Schicksal nach. Auf einmal hörte er ein Brausen, und wie er sich umblickte, stand ein unbekannter Mann vor ihm, der einen grünen Rock trug, recht stattlich aussah, aber einen garstigen Pferdefuß hatte. 'Ich weiß schon, was dir fehlt, sagte der Mann, Geld und Gut sollst du haben, soviel du mit aller Gewalt durchbringen kannst, aber ich muß zuvor wissen, ob du dich nicht fürchtest, damit ich mein Geld nicht umsonst ausgebe.' と、醜い馬の足をし、緑の上着を着た Teufel が突然大きな音を立てて現れ、何ごとも怖がらない勇気があればお金や財宝を持てるだけやると兵隊さんに言う。ただし、7 年の間体を洗ったり、髭と髪をといたり、爪を切ったり、主の祈りを唱えてはならないという約束である。その間に兵隊さんが死ねば、兵隊さんは Teufel のものになるが、生きておれば、自由の身になり一生涯お金持ちでいられるということである。兵隊さんが Teufel と約束した通りに、Teufel の緑の上着を着、熊を剥いだ皮を外套にしていると、ポケットにいつもお金が一杯あった。

7 年後、Endlich, als der letzte Tag von den sieben Jahren anbrach, ging er wieder hinaus auf die Heide und setzte sich unter den Ring von Bäumen. Nicht lange, so sauste der Wind, und der Teufel stand vor ihm und blickte ihn verdrießlich an; dann warf er ihm den alten Rock hin und verlangte seinen grünen zurück. 'So weit sind wir noch nicht,' antwortete der Bärenhäuter, 'erst sollst du mich reinigen.' Der Teufel mochte wollen oder nicht, er mußte Wasser holen, den Bärenhäuter abwaschen, ihm die Haare kämmen und die Nägel schneiden. と、Teufel は不愉快な顔をしながらも、熊皮男の体を洗い、髪をとき、爪を切ってやった。熊皮男が立派な青年になって、3 人娘の家にやって来た時、以前熊だと言って、彼を馬鹿にしていた姉 2 人は、目の前にいる立派な青年がかつての熊皮男で、末の妹と結婚するということが分ると、悔しがって自殺した。そうすると、緑の服の Teufel が現れ、「おまえの魂一つの代わりに、二つ魂を手に入れたぞ'siehst du, nun habe ich zwei Seelen für deine eine.'」と言う。

第 9 番目は『3 人の修行中の職人』である。旅に出て修行中の職人 3 人が親方 (Meister) から給料 (Verdienst) をもらえず、無一文になり、また職探しの旅を続けようとしたときのことである。Sie zogen fort, da kam ihnen auf dem Weg ein reich gekleideter Mann entgegen, der fragte, wer sie wären. 'Wir sind Handwerksleute und suchen Arbeit: wir haben uns bisher zusammengehalten, wenn wir aber keine mehr finden, so wollen wir uns trennen.' 'Das hat keine Not,' sprach der Mann, 'wenn ihr tun wollt, was ich euch sage, solls euch an Geld und Arbeit nicht fehlen; ja ihr sollt große Herren werden und in Kutschen fahren.' Der eine sprach 'wenns unserer Seele und Seligkeit nicht schadet, so wollen wirs wohl tun.' 'Nein,' antwortete der Mann, 'ich habe keinen Teil an euch.' Der andere aber hatte nach seinen Füßen gesehen, und als er da einen Pferdefuß und einen Menschenfuß erblickte, wollte er sich nicht mit ihm einlassen. Der Teufel aber sprach 'gebt euch zufrieden, es ist nicht auf euch abgesehen, sondern auf eines anderen Seele, der schon halb mein ist, und dessen Maß nur vollaufen soll.' Weil sie nun sicher waren, willigten sie ein, und der Teufel sagte ihnen, was er verlangte, der erste sollte auf jede Frage antworten 'wir alle drei,' der zweite 'ums Geld,' der dritte 'und das war recht.' Das sollten sie immer hintereinander sagen, weiter aber durften sie kein Wort sprechen, und übertraten sie

das Gebot, so wäre gleich alles Geld verschwunden: solange sie es aber befolgten, sollten ihre Taschen immer voll sein. Zum Anfang gab er ihnen auch gleich soviel, als sie tragen konnten, und hieß sie in die Stadt in das und das Wirtshaus gehen. と、Teufel は身なりは豪華だが、片方が馬の足をしている。そして言った通りにすれば、金や仕事に不自由させないし、馬車を乗りまわせる大旦那にしてやる、と言う。この Teufel と 3 人の修行中の職人とのやり取りから、Teufel と契りを結べば、魂を奪われ、天国に行けなくなることがわかる。

3 人の職人は、Teufel がやれということをやったために、死刑に処せられることになる。ところが、首を切られる寸前に、Teufel がやって来る。Teufel は、血のような赤毛の 4 頭立の馬車に乗り、石畳を火花を散らしながらやって来る。窓から白い布を振り、裁判をやり直させる。馬車から降りた Teufel は豪華な衣装を身に着け、非常に高貴な身分の者に成りすまし、被告の 3 人の職人に本当のことを言え、と言う。3 人の証言で、宿屋の主人が殺人犯として処刑された。すると Teufel は ‘nun hab ich die Seele, die ich haben wollte, ihr seid aber frei und habt Geld für euer Lebtag.’ と、狙っていた魂を手に入れたと語り、3 人を自由の身にし、生涯金持ちにした。

このメルヘンに登場する Teufel も人の魂を、しかも悪人の魂を取ることを狙っていた。そればかりか、何の罪もない 3 人の修行中の職人を救い、彼らを幸せにした。この Teufel はいわば神様のような Teufel である。善人を救い、悪人を滅ぼし、その魂を奪う。

第 10 番目は『怖いもの知らずの王子』である。ここでは、魔法をかけられているお城の大広間に kleine Teufel が真夜中に沢山現れる。そして Sie (kleine Teufel) taten, als ob sie ihn (Königsohn) nicht sähen, setzten sich mitten in die Stube, machten ein Feuer an und fingen an zu spielen. Sie zerrten ihn auf dem Boden herum, zwickten, stachen, schlugen und quälten ihn, や Der Teufelspuk kam wieder: ‘bist du noch da?’ schrien sie, ‘du sollst gepeinigt werden, daß dir der Atem stehen bleibt.’ Sie stachen und schlugen ihn, warfen ihn hin und her und zogen ihn an Armen und Beinen, als wollten sie ihn zerreißen: と、kleine Teufel は、火をおこして、賭博をする他、王子を床の上で引きずりまわしたり、つねったり、突き刺したり、なぐったり、苦しめたり、あちこちへ放り投げたり、八つ裂きにするかのように手足を引っ張ったりと、理由もなく乱暴を働く。しかし、命を取ることはしない。そして朝方には姿を消す。

第 11 番目は『Teufel とそのおばあさん』である。薄給に耐えかねた兵隊さん 3 人が脱走する。そして穀物畠 (das große Kornfeld) の中に隠れて、二日二晩何も食べず、飢え死にしそうになった時のことである。3 人の前に、火竜 (Teufel) が空中から飛んで降りて来る。3 人がここにいては飢え死にするし、外に出れば絞首刑になるし、いずれにしても死ぬばかりだと言うと、竜は 7 年間わしに仕えれば、ここから逃してやる、と言う。そして 3 人を爪で驚づかみにして、空を飛んで逃がし、叩けば欲しいだけ金の出る鞭を彼らにやる。その際、Teufel は、7 年後にお前達が謎を解くことができれば、お前達は自由の身だと言う。止むを得ず、彼らは Teufel の差し出した帳面に署名した。Teufel の竜が飛んで行った後、3 人は鞭を叩いてたくさん金を出し、旦那の衣装を着て、楽しく世の中を歩き回った。

7 年後、3 人のうちの一人が、老婆に教えてもらって、森の中にある崩れた岩が小屋みたいに見えるところへ行く。ここには、Teufel のおばあさんがいて、Teufel の出す謎解きの手伝いをしてくれる。Um zwölf Uhr nachts kam der Drache angeflogen und verlangte sein Essen. Die Großmutter deckte den Tisch und trug Trank und Speise auf, daß er vergnügt war, und sie

aßen und tranken zusammen. Da fragte sie ihn im Gespräch, wies den Tag ergangen wäre, und wie viel Seelen er kriegt hätte. 'Es wollte mir heute nicht recht glücken,' antwortete er, 'aber ich habe drei Soldaten gepackt, die sind mir sicher.' sprach der Teufel höhnisch 'die sind mein, denen gebe ich noch ein Rätsel auf, das sie nimmermehr raten können.' 'Was ist das für ein Rätsel?' fragte sie. 'Das will ich dir sagen: in der großen Nordsee liegt eine tote Meerkatze, das soll ihr Braten sein: und von einem Walfisch die Rippe, das soll ihr silberner Löffel sein: und ein alter hohler Pferdefuß, das soll ihr Weinglas sein. Als der Teufel zu Bett gegangen war, hob die alte Großmutter den Stein auf und ließ den Soldaten heraus. このように、Teufel も人間と同じように飲み食いする。ただ Teufel は人間と違って、常日頃人間の魂を奪おうと、餌食になる人間を狙っている。

7 年が経つと、Teufel が帳面（閻魔帳 Unterschriften）を持って現れ、地獄へ連れて行くと言う。しかし、兵隊さんが謎解きをすると、Teufel は大きな叫び声を挙げ、どこかへ飛んでいってしまう。そこで兵隊さんたちは鞭で好きなだけお金を出し、一生楽しく暮らした。このメルヘンの Teufel が住むところは岩小屋（die Felsenhütte）であり、地獄ではない。

第 12 番目は『主の動物と Teufel の動物』である。主なる神様がすべての動物をお創りになつたが、山羊だけ創るのを忘れた。そこで、Teufel が長い尻尾の山羊を創ったが、その長い尻尾が茨の生垣に引っかかり、Teufel はそれを引き離すのに苦労をした。それにうんざりした Teufel は、山羊の尻尾を全部噛み切ってしまった。山羊が果物のなっている木をかじったり、ぶどうのつるに損害を与えた、柔らかい草を台無しにするので、神様は狼をけしかけ、山羊を殺した。これを知った Teufel は、神様に多額の弁償を要求した。神様は Teufel をうまく騙し、金を支払わなかった。腹を立てた Teufel は残っていた山羊の目をすべてくりぬき、自分の目を入れた。それで、山羊は Teufel の目をしている。逆に Teufel は山羊の姿になるのが好きである。ここでの Teufel 自身の告白「自分自身が害を与えることばかり考えているので、私の創ったものは、それと違う性質を持つことができなかったのです。'gleichwie selbst mein Sinn auf Schaden geht, konnte, was ich erschaffen, keine andere Natur haben,'」は注目すべきである。

第 13 番目は『農民と Teufel』である。農民が畑仕事を終えて帰り支度をしていたときのことである。畑の真ん中の燃えている石炭の山の上に、小さな黒色の Teufel が腰を掛けていた。Teufel は、金は有り余るほど持っている、畑に実ったものをくれ、と言う。農民は取引に応じ、地上のものが Teufel のもの、地下のものが自分のものということに決めた。収穫の時に Teufel がやってきて見ると、畑に実っていたものは蕪であった。Teufel は一杯食わされた。そこで、今度は Teufel は逆の提案をした。農民はこれに応じ、畑に小麦（Weizen）を撒いた。小麦が実ると、いち早く刈り取った。やって来た Teufel に残されていたものは、切り株だけであった。Teufel は怒り狂い、岩穴の下に姿を消した。この Teufel に、人間の魂を奪おうとするそぶりはまったく見られない。むしろ、滑稽で、哀れである。

第 14 番目は『土まんじゅう』である。真夜中になると、突然ピューピューとつんざくような音がして der Böse が現れる。der Böse は見張りをしている 2 人に、墓の中のものはわしのもので、連れて行くからそこを退け、そうしないと首をひねって殺すぞ、と言う。こう言われても、2 人は墓塚の上から退こうとしない。そこで Teufel は態度を変え、お金をやるから退け、と言う。兵隊さんが長靴一杯金をくれれば退いてもいいと言うと、Teufel も納得し、お金

を取りに行く。Teufel はお金を一杯持ってきて、長靴に何度も注ぎ込むが、長靴は一杯にならない。兵隊さんが長靴の底をくり抜いていたからである。兵隊さんに一杯食わされるこの Teufel も愚かな滑稽さがある。最後に、Teufel は「日の出の最初の光が天にさす」と、「大きな叫び声をあげて逃げ出」す。Teufel は日の光が嫌なようである。またこのメルヘンには、der Schwarze（黒い奴）、der Unhold（醜い者）、der böse Geist（悪霊）と、Teufel の色々な表現が出てくる。「赤い羽根の旦那 Herr mit der roten Feder」とも呼ばれている。このメルヘンでも、Teufel は馬の足（Pferdefus）をしている。

第 15 番目は『トルーデおばさん』である。女の子は、親が行つては駄目と注意するのも聞かず、トルーデおばさんの所へ出かけて行く。‘Ach, Frau Trude, mir grauste, ich sah durchs Fenster und sah Euch nicht, wohl aber den Teufel mit feurigem Kopf.’ ‘Oho,’ sagte sie, ‘so hast du die Hexe in ihrem rechten Schmuck gesehen:」このように、女の子が「火の玉の頭の悪魔がはっきり見えたんだもの」と言うと、トルーデおばさんは「それじゃ、お前はちゃんと着飾った魔女を見たのだよ」と答える。「火の玉の頭の悪魔」とは自分のことで、おばさんは自分が魔女だと認める。

第 16 番目は『フリーダーとカーターリースヘン』である。カーターリースヘンが木の上から戸を落とすと、下にいた泥棒たちが‘der Teufel kommt vom Baum herab,’と叫んで、逃げ出した。次にカーターリースヘンが牧師さんの畑で、蕪を抜いていた時、通りかかった男が彼女を「das wäre der Teufel」だと思い、牧師さんに‘Herr Pfarrer, in Eurem Rübenland ist der Teufel und rupft.’と言って、牧師さんを連れて来た。その時、かがんでいたカーターリースヘンが立ち上がった。すると、それを見た牧師は‘Ach, der Teufel!’と叫び、2 人は逃げ出した。このように、得体の知れないもの、不気味なもの、恐ろしいものが Teufel と呼ばれ、怖がられている。

第 17 番目は『小農民』である。粉屋の奥さんが亭主がいない時、家で牧師（der Pfaff）と浮気をしていた。突然亭主が帰ってきたので、奥さんはあわてて牧師を家の入り口の部屋の戸棚の中へ隠した。小農民は、からすの占い師（Wahrsager）に、‘draußen im Schrank auf dem Hausehrn, da steckte der Teufel.’と言わせる。すると、亭主は‘der Teufel muß hinaus,’と言う。このように、戸棚の中にいる得体の知れないものが Teufel と呼ばれている。堕落した浮気牧師を非難をこめて Teufel と言っている面もないことはない。

第 18 番目は『7人のシュヴァーベン人』である。冒險の旅に出たシュヴァーベン人 7 人が兎に出くわす。それを獰猛な野獣（des grausamen und wilden Tieres）、怪物（das Ungeheuer）と思い、ミヒヤルが so ischt es wohl der Teufel gar. と叫ぶ。それを受けてイェルグリも ischt er es nit, so ischts sei Muter oder des Teufels Stiefbruder. と叫ぶ。それを den Drachen とも呼んでいる。このように、ここの Teufel とは恐ろしい（と思った）怪物のことである。

第 19 番目は『鍛冶屋と Teufel』である。これは『Anmerkungen zu den Kinder- u. Hausmärchen der Brüder Grimm Neu bearbeitet von Johannes Bolte und Georg Polivka Zweiter Band Georg Olms Verlagsbuchhandlung Hildesheim 1963』に収録されている。鍛冶屋が生活に困り、森の中で首吊り自殺をしようとしていると、長い白い髪を生やした男が手に大きな帳面を持ってやってきた。自ら Teufel. だと名乗るこの男は‘Hör, Schmied’, sprach er, ‘schreib deinen Namen da in das große Buch, so soll dirs wohl gehen zehn Jahre lang; aber darnach bist du mein, da hol' dich’ (S.168) と、名前を帳面に書き込めば、10 年間楽な暮らしをさせてやる、

その後はお前は俺のもので、連れて行く、と言う。この Teufel は Da machte sich der Teufel so groß wie eine Tanne und so klein wie eine Maus. (S.168) と、もみの木のように大きくなることができるし、またはつか鼠のように小さくなることもできる。鍛冶屋が Teufel との契約を了承し、名前を帳面に書き込んで家に帰ると、ドゥカーテン金貨が一杯あった。2~3 年後、Teufel が訪れてきて、一度入ると出られない革袋 (einen ledernen Sack) をくれた。10 年が経ち、Teufel が鍛冶屋を連れにやってきた。しかし鍛冶屋は Teufel をはつか鼠に変身させ、その鼠を革袋の中にいれ、棒で殴りつけた。Teufel は悲鳴を上げた。鍛冶屋は Teufel の帳面から自分の名前を破り捨てるなら袋から出してやると言った。袋から出してもらった Teufel は地獄へと帰って行った。それから鍛冶屋は楽しく暮らした。しかし、病気になり、死を悟った鍛冶屋は、釘を 2 本と金槌を 1 本棺桶に入れるように頼んで息絶えた。天国に行くと、使徒ペートゥルスは、鍛冶屋が Teufel と契約を結んだので (weil er mit dem Teufel im Bund gelebt hätte.) (S.169) 天国に入ることを許さなかった。そこで鍛冶屋は地獄へ行ったが、Teufel が地獄に入ってくれなかった。腹を立てた鍛冶屋は地獄の門の前で大騒ぎを始め、それを見ようと覗いた ein Teufelchen を捕まえ、その鼻を釘で門に打ち止めた。この Teufel の悲鳴を聞いて覗いたもう一人の小さな Teufel も、鍛冶屋は捕まえて、耳を門に打ち止めた。それで仕方なく年寄りの Teufel は天国の神様のところに行き、「地獄の秩序がもはや保てません。er sei nicht mehr Herr in der Hölle.」(S.170) と言い、鍛冶屋を是非天国に受け入れて欲しいと頼んだ。愛する神様と使徒ペートゥルスは Teufel を追い払うには、鍛冶屋を天国に受け入れるしか方法がなかった。こうして鍛冶屋は今でも天国に平気で座っている。

第 20 番目は『泥棒とその師匠』である。ヤーンは、息子を泥棒（実際は自在に変身する魔法使い）の師匠 (Gaudeifsmeester) に見習いとして預ける。息子は、師匠から魔法の使い方と盗み方 (hexen und gauden) を学ぶ。師匠は、1 年後に息子が何に変身したかを言い当てるならば、謝礼の 200 ターラーはいらないと言う。1 年後、父親は泥棒の師匠のところに向かって旅立つ。途中、息子が何に変身したか、あれこれ思案しながらとぼとぼ歩いていると、小人がやって来た。小人は、父親から事情を聞き、息子さんは小鳥に変身していると教えてくれた。変身の術を見破られた息子の師匠の泥棒は不思議がり、de Düvel (悪魔) が教えやがったなと言って悔しがる。このように、Düvel が魔術（変身の術）さえ見破る能力、あるいは知識を備えていることがわかる。『ルンペルシュティルツヘン』と同じである。

第 21 番目は『黄金の山の王様』である。船が沈没して財産を失った商人が畑を行ったり来たりしていると、小さな黒い小人が突然側に立っていた。小人は、商人から事情を聞き、家で最初に脚にぶつかるものを 12 年後にここに持ってくると約束するならば、金は欲しいだけやると言った。商人はそれは犬以外にありえないと思って、署名入りの証文 (Handschrift und Siegel darüber) を小人に渡した。商人が家に帰ると、最初に足にしがみついてきたのは、息子であった。一ヵ月後、屋根裏部屋にお金が山ほどあった。大きくなつて父親から事情を聞いた息子は、o Vater, laßt Euch nicht bang sein, das soll schon gut werden, der Schwarze hat keine Macht über mich. と、黒い小人のことを der Schwarze (黒い奴) と呼んでいる。

12 年後、Der Sohn ließ sich von dem Geistlichen segnen, und als die Stunde kam, gingen sie zusammen hinaus auf den Acker, und der Sohn machte einen Kreis und stellte sich mit seinem Vater hinein. Da kam das schwarze Männchen und sprach zu dem Alten 'hast du mitgebracht, was du mir versprochen hast?' Er schwieg still, aber der Sohn fragte 'was willst du hier?' Da sagte

das schwarze Männchen 'ich habe mit deinem Vater zu sprechen und nicht mit dir.' Der Sohn antwortete 'du hast meinen Vater betrogen und verführt, gib die Handschrift heraus.' 'Nein,' sagte das schwarze Männchen, 'mein Recht geb ich nicht auf.' Da redeten sie noch lange miteinander, endlich wurden sie einig, der Sohn, weil er nicht dem Erbfeind und nicht mehr seinem Vater zugehörte, sollte sich in ein Schiffchen setzen, das auf einem hinabwärts fließenden Wasser stände, und der Vater sollte es mit seinem eigenen Fuß fortstoßen, und dann sollte der Sohn dem Wasser überlassen bleiben. と、父と息子は畑に行き、輪を作り、その中に入り、黒い小人と話し合った。そして小人は息子を誦め、小舟に乗せ、成行きに任せることで、話がついた。ここでも der Schwarze (Teufel) は、「人間を騙したり、堕落させたり（誤った道に誘惑したり）」する。

息子は糺余曲折を経て黄金の山の王様になる。王様は、姿が見えなくなる外套を着て、自分を裏切って別の人と結婚の祝宴を開いているお後の食べ物や飲み物をすべて取り上げてしまう。この不思議な現象に、お后は狼狽し、恥じ入り、泣き出し、ist denn der Teufel über mir, oder kam mein Erlöser nie? と言う。このように、奇妙で説明のつかない魔訶不思議な現象の背後に Teufel がいると考えられている。

第2章 日本の昔話に登場する鬼の像

『日本の昔ばなし』で鬼が出てくる話は、『地蔵浄土』、『牛方と山姥』、『飯くわぬ女』、『桃太郎』、『百合若大臣』、『鬼の妹』、『鬼が笑う』、『夢見小僧』、『べに皿かけ皿』、『鬼のむこ』、『三枚のお札』、『一寸法師』、『五分次郎』、『笛吹き聟』、『鬼と三人の小ども』、『大工と鬼六』、『南島のさるかに』、『手なし娘』、『立市買い』の19話（『日本昔話大成』も含めると166話）であり、グリム童話の Teufel が出てくる話と偶然ながら同じ数だけある。この内、『南島のさるかに』、『手なし娘』、『立市買い』は、鬼は何かを言い表す、単なる言葉としてしか出てこない。ちなみに、『日本の昔ばなし』にも『日本昔話大成』にも、悪魔は登場しないし、悪魔という言葉も出てこない。

第1番目は『地蔵浄土』である。

（地蔵さまは）「ほだからさ、これから爺さまがだんだん奥に入って行くと、赤え障子こが立って、鼠どはずっぽり嫁御とり支度しているから、そこへいったら、唐臼つきでもしてすけ申さい。それからまた奥へ行って、黒え障子この立っているところへ行くと、鬼どあずっぽりて博奕打ちしているから、そこへ行ったら鶏の鳴くまねをして、金をさらって来もせあ」と、教えてくれたそうな。…

それから、鼠からもらった赤い着物をもって、ずっと奥の方へ行くと、黒い障子の立っているところへ行った。おおぜいの鬼どもがいて、びったくた、びったくたと博奕をうっていった。爺さまは鬼どもが知らないように、廐の桁の上へのぼっていて、夜中になってから、箕をばたばたとたたきながら、「けけろう」と、鶏の時を立てるまねをした。すると鬼どもは「あれは、いち番どりだか」といったので、爺さまはまたしばらくたってから、箕をばたばたとたたいて、「けけろうやえ」というと、「あれは二ばんどりだか」と、鬼どもはいった。爺さまは、またしばらくたってから、箕をばたばたとたたきながら、「けけろう、けけろう」と言うと、鬼どもはおどろいて、「それ、三ばんどりだ、夜があけたらごとだ」といって、錢はそ

のままそこらに散らかしたまま、われ先にどこかへ逃げて行ってしまったそうな。爺様は…その金をみんなもって帰って来たそうな。…

すると、こんどは黒い障子の向こうで、「びった、がった」と音がするので、「これあなんだべ」と思って、(隣の爺が)のぞいて見ると、鬼どもが集って、博奕を打っていたそうな。(隣の)爺さまは、…夜中に箕をばたばたたいて、大きな声で、はあ、いちばん鶏っと、どなったそうな。すると、鬼どもはおどろいて、「あれあ何だ」といって、ひょうひょう面になったそうな。すると、爺さまはまた大きな声で、はあ、二ばん鶏っと、どなったそうな。すると、鬼どもはおどろいて、「あれは何だ」といってさわぐので、爺さまは、こんどこそ鬼どもをたまげさせて、追い出そうと思って、もっと大きな声で、さんばんどりと、どなったそうな。すると鬼どもは、「何だ、あの声は、昨夜にせどりだ、俺たちの金をさらって行ったが、今夜もまた来ている。ふんづかまえてやれ」といって、厩の桁にのぼって来たそうな。

鬼どもは大急ぎでのぼったものだから、鉤に鼻の穴を引っかけて、ぶらりと下がったものがあったそうな。爺さまはこれを見て、大声で笑ったものだから、鬼どもは「その爺、にがすな」といって、大勢で爺さまを捕えて、「この爺、ゆんべも、俺らの金取った」といって、ぶったりけったりしたそうな。

第2番目は『牛方と山姥』である。

(牛方が) 村の入口の竹藪の下の水たまりのあるところまで来ると、もう日の暮ちかくになりました。竹藪の下を通っていると、山姥がかくれていて、だしぬけに「牛方、魚いっぴきけろ」といいました。…山姥はものすごい目をして、「…魚けなければ、とって食うから、覚えてろ」といって、おどかしました。…牛方は…逃げました。…間もなく髪の毛をふり乱して目玉を光らした鬼婆が、舟うちのところへやって来ました。…牛方は…また逃げ…大きな柳の木にのぼりました。…「枯れた木の枝は、どしんどしんと強く力を入れてふんで、枯れない方の木の枝は、軽くさっと足をかけてのほんのだ」と、教えました。…山姥が強くふんだ枯れ枝の枝がぼんと折れて、山姥は川の中にどぶんど落ちました。…牛方はその間に柳の木からおりて、また逃げ出しました。…灯がぴかぴかと光っている…家にたどりつきました。家の中には若い女がひとりいりに火を焚いてあたっていました。…女は、「…家の婆はひどく鼠をおっかながる婆だから、鼠がくると思って、びくびくして櫃の中にかくれるといい出すごったから、このときに櫃に蓋をして、すき間から湯を入れて殺してしまうがええ」と、教えました。…婆はいそいでその(櫃の)中に入りました。…娘は厚い板をもって来て、櫃に蓋をして、その上に重い石をのせました。そして、二階から牛方を呼んで、ふたりで大釜にたくさんの湯をくらくらわかして、すき間から櫃の中にたぎっている湯をつぎこみました。山姥は、櫃の中で焼け死んでしまいました。

第3番目は『飯くわぬ女』である。

ある日の夕方、その男の家へきれいな女が来て、「わたしは旅の者ですが、日がくれてなんぎをしておりますから、どうかひと晩とめてたもれ」と、宿をたのみました。男は「宿はかしてええが、うちには食べるものがいよい」といって、ことわりました。けれども、女は「わたしはなんにも食べません。ものを食わん女です。泊まるだけでええです」といって、たのみました。…

女はあくる朝になんでも、出ていこうとしません。いろいろ用事をしてくれるので、男はいつまでもとめておきました。なによりもよいことは、なにもたべないで仕事ばかりしていることだ。けれども、いつまでたってもなにも食わないので、男は少したべてみいというてみたが、女

は匂いだけかいどれればええといって、どうしてもたべなかつた。……

（いちばん仲のよい友だちが）「おい、…まだ気がつかんのか。おまえの女房は人間じゃあないよ。…」と、おしえてくれました。…

女は一人になると、米をときはじめました。火をどんどん焚いて、飯を炊きはじめました。飯が出来るとにぎり飯を三十三こしらえて、台所から鯖を三匹とて来て火にあぶりました。それから立膝をして、髪の毛をばらばらほどいた。どうするか見ていると、頭のまん中の大きな口の中ににぎり飯やら、あぶった鯖やらどんどん投げこんで、食つてしまひました。…

女房は頭がいたいといって、寝ていました。どうしたのかとたずねると、「どうもせんが、気持が悪うてねとる」と、ねこなで声で答えました。「そりゃいかん。薬でものんでみるか、祈祷でもしてもろうてみるか」といったら、「わたししゃ、どうすりゃええかわからん」といって、いまにも飛びつきそうなようすをしました。…「何のたたりだあ。三升飯のたたりだあ。鯖三匹のたたりだあ」と友だちがいようと、女はそれを聞いて飛びおき「うーん、お前たちや、見ていたのう」といって飛びついて来て、友だちを頭からがしがし食いだしました。

男はひどくびっくりして逃げようすると、女は友だちを食つてしまふとその男をとらえて、子猫のようにぶらさげて頭の上にのせて、さっさと山の方へ逃げて行つてしまひました。そして、野をこえ、山をこえて、うさぎのようにかけて行きました。森の中にかかったとき、目の前に木の枝がついていたので、しめたと思って枝にぶらさがりました。飯食わぬ女房の鬼はそれとも気づかないで、どんどんかけて行きました。

男は木からおりて、そのよもぎとしょうぶのくさむらの中に、そっとかくれていました。すると鬼女は男のかくれているところに引き返して来て、「お前がどこにかくれていても、逃がすものか」といって、とびかかろうとしました。けれども、もう少しというところでとびのいて、「ああ、うらめしい。よもぎとしょうぶぐらい、このからだに毒なものはない。この草にふれたらからだがくさるんじゃ。その草がなかったら、お前も食つてしまうのになあ」といって、たいそう残念がりました。男はこれで大丈夫だと思って、草をとて鬼に投げつけました。さすがの鬼も毒にかかって死んでしもうたそうです。

第4番目は『桃太郎』である。

桃太郎が……両方の手をついて、「爺さまあ、婆さまあ、わ大きくなつたんだしけ、鬼が島さ鬼退治に行きたいしけあ、日本一の黍団子よこさって下さえ」と、頼んだそうです。爺も婆も「どうしてうがまんだ年もとねだしけあ、鬼ね勝でなだで」といってとめたけれども、…きかなかたそうです。…

鬼が島に行って見ると、大きな黒い門が立っていたそうです。猿が門をどんどんと叩いた。すると、中から「どーれ」といって、赤鬼が出て來たそうです。桃太郎は「俺は日本一の桃太郎だ、鬼が島さ鬼退治に來たすけあ、みんな覚悟しろ」といって、刀を抜いてかかった。猿は長い槍もって、犬と雉は刀をもって斬ってかかった。そこらにいた小さな鬼は大きわぎして、奥の方へ逃げて行った。奥では鬼どもは酒盛りのさいちゅうだったそうです。そして桃太郎が來たのをきいて、「なに、桃太郎だば何だば」とばかにして、かかって來たそうです。こっちの四人は日本一の黍団子をくっているので、何千人力にも強くなっているので、鬼どもはみんな敗けてしまったそうです。

そして、鬼の大将の黒鬼は、桃太郎の前に手をついて、大きな目から涙をぼろぼろとたらして、「とってもかないまへんしけあ、命ばかりは助けて下さや、今から決して悪いことしまへん」

といって、桃太郎にわびたそうです。桃太郎は「したら今から決してわりいことしねなら命ばかりは助けてやる。」そういうと、鬼は「宝物はみんな上げます」といって、あるだけの宝物を桃太郎にやったそうです。

第5番目は『百合若大臣』である。

「この島に人がいるはずがない、鬼ではないか。」一人の物知りが「いやいや、しきりに頭を下げているから、人間に相違ない。船をつけてかいの先に米つぶを三つぶつけてさしだせば、人間ならそれをとて口に入れいつまでもかんでいる。鬼なら丸のみにしてしまう」というので、船を島につけて見ました。

第6番目は『鬼の妹』である。

ぼっくわが眠ると、(妹の)あせっくわはそとに出で行って、夜明け頃に帰って来るときは、いつも冷たくなって布団のなかに入って来る。

ぼっくわは…ある夜眠ったまねをしていました。ところがあせっくわはぼっくわの寝息をうかがいながら、そとに出でていきました。ぼっくわはふしきなこともあるもんだと思って、あせっくわの後からついて行きました。村はずれの牧場にいって、そこに放ってある牛を横だきにして血を吸い始めました。…妹と思っていたのは鬼でした。鬼があせっくわを食ってしまって、妹に化けているのだと思って、ぶるぶるふるえながらもどってきました。

その翌日、ぼっくわは妹がないとき、両親に「あせっくわは鬼だから早く追いださないと、いまにみんな食われますよ」といいました。ところが両親はたいそう怒って、「…お前出て行け」としかられ…出て行きました。…

ぼっくわは自分の島の峰に立って、島を見ると、人間は一人もいない。ようやく自分の生まれた家にいって、「ごめんなさい」というと、「ぼっくわか、お前はどこに行っていた」といって、あせっくわが出て来ました。「さあ早く上がり」といいました。ぼっくわが家にあがると、あせっくわはわっと泣き出しました。「ねえぼっくわ、お前が行ってから、この村に流行病がはやって、村の人はみんな死んでしまったんだよ。お父さんもお母さんも死んでしまった。わたし一人残ったんだよ」といいました。「いますぐ、この米をといでくるから、お前はこの太鼓をたたいて遊んでおれよ」といって、出かけました。

ぼっくわは太鼓をたたいて遊んでいました。そこへ白い鼠と黒い鼠とがやって来ました。そして「ぼっくわ、ぼっくわ」と、いいかけました。「おれたちは、お前の親だよ、あせっくわはいま牙をとぎに行ったんだよ。あせっくわはお前のいった通り鬼だったよ。村の人をみんなたべてから、とうとうわしらも喰われた。いま牙をといで来てお前を食べるから、早く逃げてくれ。…」…ぼっくわは馬に乗って逃げました。

あせっくわは家に帰って来ました。ところがぼっくわはおらず、鼠が太鼓をたたいていました。「こんちくちょう」といって、鼠を追い出し、「あったらぶいんを逃した」というて、向こうを見るときぼっくわが坂の上を逃げていました。逃がしてなるものかと、あせっくわが追いかけました。しばらくして、ぼっくわに追いつきそうになりました。ぼっくわは仕方がないから馬の片脚を切って逃げました。あせっくわが脚を喰っている間に、馬は三つの脚で逃げました。また追いつかれたので、馬の片脚をきると、とうとう馬は倒れて歩けなくなりました。あせっくわはその馬を喰いはじめました。あせっくわが馬を食っているあいだに逃げて、路傍に生えている松の木にのぼりました。あせっくわはまた追いかけて来て、松の木にのぼっているぼっくわを見つけて、だんだん登って来ました。……

…あせっくわがぼっくわを追いかけて木に登ろうとしているところに虎がやって来て、あせっくわと格闘をはじめました。…虎があせっくわの首に喰いついてかみころしました。

第7番目は『鬼が笑う』である。

嫁入りの日になると、聟どのの家から立派な迎えの駕籠が来た…ふいに空からまくろい雲がおりてきて、花嫁の駕籠をつつんでしまった。…黒い雲は駕籠のなかの花嫁をさらってとんで行ってしまいました…

尼んじょさまがこう語りました。「お前さんのさがねている娘さんは、川向こうの鬼屋敷にさらわれて来ているが、川にはおお犬こま犬が張番をしているすけに、どうしても行かれない。そうだども昼のうちはいねむりしていることもあるすけに、そのすきを見て渡れば渡れんこともない。だけど橋はそろばん橋というて、珠がたくさんついているすけに、その珠を踏まんようにして、渡って行きなされ。もし珠を踏みはずすと、お前さんの生まれ里へ落ちて行くすけに、気をつけんばならんでの」といいました。…

教えられた通り川の端へ来たら、ちょうどおお犬こま犬が居眠りしていたので、そのすきにそろばん橋の珠ふまんように用心して川を渡りました。…母親は思わずじょうやと呼ぶと、娘が顔を出したので二人は走り合って抱きついて喜びました。

…「鬼に見つけられると大ごとだすけ」というて、石の櫃に母親をかくしました。そこへ鬼がやってきました。「どうも人間くさい」といいながら、鼻をくんくん鳴らしました。娘がそんなことは知らんというと、そんなら庭の花を見て来ようといいました。庭にはふしきな花があって、家の中にいる人間の数だけ咲くようになっていました。それが今日は三つ咲いているので、鬼はごうき怒ってもどってきました。「お前はどこかに人を隠したんだろう」というて、今にもつかみかかろうとするので、娘はどうしようばと思案していましたが、ふと思いついて「俺が身持ちになったすけに、花が三つになったのだろう」といいました。ところが怒っていた鬼が急に逆立ちせんばかりに喜んで、うれしさのあまり大声を出して家来どもを呼びあつめ、「さあ家来ども、酒をもって来い、太鼓をもって来い、川の番付きもたたいてしまえ」というて、飛びまわりました。家来どもも喜んで「酒だ太鼓だ、それおお犬こま犬たたき殺せ」と、大さわぎを始めました。

やがて鬼どもは酒によいつぶれて、寝ころんでしまいました。大将の鬼が「娘、俺らねぶつとうなったすけに、木の櫃へ案内しれ」といいました。…

それからいそいで母親を石の櫃から出して、鬼の家を逃げ出しました。…乗物のしまってある蔵へ来て「万里車がよいか千里車がよいか」と相談していると、そこへ庵女さまが出て来て「万里車も千里車もだめすけに、早う舟でにげなされ」といいました。それで母子は舟に乗って、川を一生けんめいに逃げました。…

（眠りから覚めた鬼は）「この餓鬼は逃げやがったな」というて、家来どもを呼びおこしました。そして乗物蔵へ行って見ると舟がないので、みんな川へ出て見ました。すると、母子の舟はもう遠くの方へ消えようとしていました。そこで、鬼は家来どもに「川の水を呑みほてしまえ」といいつけました。大せいの鬼どもはがってんだとばかり、川に首をつっこんで、がぶがぶと水を呑みはじめました。すると川の水はへって、それにつれて母子の舟はだんだんあともどりして来ました。今にも鬼の手がとどくほどになったので、舟のなかの母子はもうしょせん助からないとあきらめていると、そこへまた庵女さまが現われて、「お前さんたちぐずぐずせん、早よ大事なところを鬼に見せてやりなされ」というて、庵女さまもいっしょになって、三人が

着物のすそをまくりました。さあ、それを見た鬼どもはげらげら笑うわ、笑うわ、ころがって笑ってその拍子に呑んだ水をすっかりはき出しました。…母子はあぶない命を助かりました。

第8番目は『夢見小僧』である。

正月の十六日には船は鬼が島についた。浜だから、船はごろっとついた。鬼ど（も）がその船を見つけてとろうとしたところが、船の舳先には「これを助けた者は、一家一門もいとこまでみな殺す」と書いてあった。艤には「これを助けた者は、一家一門もいとこまで幸せに暮らせる」と書いてあった。鬼どもはやあやあいって、船をひっぱったところが、船が二つに割れて、なかから子供がでて來たので、これをかまうということになった。ところが一人の鬼が「そうはいかん、こうでしまうと大将におこられる」というので、まず大将にその話をした。すると大将は「そらよかったです。姐で肴切りにしてもって來い」といった。子供は「待ってくれ、斬られてこまめになつてからはいかん。いまのうちに話したいことがある。大将にあわせてくれ」というと、鬼どは子供を大将のところにつれて行った。

子供は大将のところに行くと「わしどは三人で賭けをして、一人は竜宮に、一人は地獄極楽に、俺はここへ来て宝物を見て帰る約束をした。俺は死ぬ前に宝物を見て死にたい。見て死ねばあの世で話が出来る」といった。すると、大将は、棒を三本もって来て見せて、「一本は千里棒というもので、千里いえば千里とぶ。一本は生き棒というもので、死んだ人間の体をなでれば生きかえるもの。一本は聴耳。これは鳥けだもののいうことがわかるもの」と教えた。「手にどもさわれてくれ、三人そろったときに、お前はにぎっても見なかつたかといわれるから」「にぎってもよいが、ものいわじにぎれ。」子供はにぎるが早いか、「千里、千里」というて、大阪の里までとんだ。

第9番目は『べに皿かけ皿』である。

（山奥に）灯が見えました。行って見ると、一人の婆さまが糸を紡いでおりました。紅皿は栗ひろいに来て、遅くなつて帰れなくなりましたから、どうか一晩とめて下さいと頼みました。婆さまは「わしは泊めてやりたいけれど、息子は二人とも鬼だよ。いまに帰つて来て、喰われるよ。それよりか帰る道を教えてやろう」といって、道をよく教えてくれました。それから袋に栗を一ぱいと、小箱と一握りの米とをくれました。「栗は母さまに証拠にもって行きなさい。この小箱は、何でも欲しいものがあるとき、その名をいって三度たたけば出る小箱だよ。それから途中で鬼の息子にあつたら、米をかみくだいて口の周りに塗つて死んだふりをしいなさいよ」と、教えてくれました。

紅皿はお礼をいって、教えられた道を歩いて行きました。すると笛の音が聞こえて来ました。米をかみ碎いて口の周りにぬつて、道端に死んだまねをしていると、赤鬼と青鬼とがやってきました。「やい、兄貴、人くさいぞ」といって、…しばらくようすを見つめましたが、「だめだ、兄貴、腐っている。口には虫が一ぱいだ。」といつて、また笛を鳴らしながら行つてしまひました。

第10番目は『鬼のむこ』である。

（大水が出て渡れそうもない川の所におなごだちがやってきて困つてゐると、）鬼がやって来て「そこで何をしているのか」とたずねました。「大水のために川がわたれないで困つています」というと、鬼がいには「よし、それなら渡してやろう。そのかわりにお前には娘があるだらう、その中の一人をおれの嫁にやるのだぞ。」おなごだちは（寡婦）はしなく「おー」と答え、

娘を一人やる約束で、鬼に川を渡してもらうことにしました。鬼はおなごだちをむこう岸に渡してから、「いつか雨の降る日に娘を迎えるに来る。そのとき娘をやらぬといつたら、お前の命はないぞ」と、いいすててわかれました。…

約束の日に鬼がやって来ました。雨のしくしく降る日でした。鬼は末娘をだき上げて、「嫁かなとったい、とったい」と、とくいになっておとまだるかなをつれて行きました。途中の小川をわたらなければならなかつたが、その日もまた洪水でした。鬼はおとまだるかなをだき上げ、帶腹を角にひっかけて頭でささえながら、いよいよ川をわたりはじめました。するとむこう岸につこうとするところで、鬼は早瀬に足をふみ外してつまずきました。おとまだるかなはそのときうまく岸にとび上りました。鬼はとうとう急流に押し流されて深い淵に巻きこまれ、…悲鳴をあげなら死んでしまいました。

第11番目は『三枚のお札』である。

（お寺の小僧が）「和尚さん、おっさん。栗こ拾いにえってもえんべしか」と頼んだ。和尚さんは「小僧や、小僧や。山には鬼婆がいるから、行かぬ方がええ」といわれた。…

小僧は一生けんめいに栗こ拾っているうちに、だんだん暗くなつて来て、風がごうごう吹いて鬼婆が出て來た。そして鬼婆の家につれて行かれた。…夜中ごろになると、…婆は一尺も口を開けてにーこかーことかね（おはぐろ）をつけていた。小僧はこの鬼婆に食われてしまうのかと思って、泣き声で「婆さん、婆さん。うんこが出たくなつた」といった。鬼婆は「そこの囲炉裏のすみにけれ」といった。（そこは嫌だと言うと）「んだら、そこのとり（土間）さまけれ」（そこも嫌だと言うと）「ええめんどぐさい、そんなら綱をつけてやるから、せんちえ（雪隠）に行ってこい」といって、小僧の腰にふといふとい綱をつけてやつたそうだ。

小僧は雪隠に行って、逃げるのはいまだと腰の綱をといて柱にゆわえつけ、和尚さんからもらつたうとい札を一札はりつけて、俺の代わりに返事をしてくれとたのんで、鬼婆の家からにげだした。鬼婆は小僧がなかなかもどらないので、「ええか小僧」とよぶと、雪隠のお札は「まだ一まだ一」と答えた。鬼婆はなんべん呼んでも小僧は「まだまだ」といつてなかなかもどつて来ないので、「なんたら長びりな小僧だべ」といって、小僧の腰に結んだ綱をひくと、雪隠の柱ががたがたとなつたので、「それ、小僧あ逃げた」とさけんで、裸足になって追いかけて來た。

まくらん山をどんどんどんどん逃げていると、後ろの方から「小僧やまで」と、鬼婆が追いかけて來た。そしてもう少しで小僧はつかまれそうになつたので、またお札を一枚だして「大きな砂山出はれ」と投げると、たちまちうしろの方に砂山ができる、鬼婆がのぼるとくずれ、…小僧は逃げた。そしてまた野超え山超えにげるうちに、また鬼婆に追いつかれるようになつたので、「大きな川出はれ」といって、お札を一枚なげると大川が出来て、鬼婆は泳げば流され、泳げば流されしているうちに、小僧は逃げて行った。

小僧はやっとお寺にかけつけた。庫裡の戸をたたいて、「和尚さん、和尚さん、鬼婆に追われて來た、早く戸をあけてくれ…和尚さん早くしないと鬼婆に食われてしまうよ」というと、和尚さんは…やっと戸を開けてくれた。小僧は「いま鬼婆が來る、和尚さん早く助けてくれ」といって逃げこむと、和尚さんは大きな葛籠を出して、小僧をなかに入れて、天井につり下げる知らぬふりをしていた。そこへ鬼婆がとんで來て「和尚さん、和尚さん、小僧は來なかつたか」「來ないけ、來ないけ」「んにゃ來たはづだ、和尚さん。」そういうて鬼婆は天井の葛籠を見つけて、「あれだ、和尚さん。あれをあけてくれ」とあらげるので、和尚さんは「そんなら俺のいうことを聴くなら見せる」といった。

そこで和尚さんが「高すく、高すく」というと、だんだんに大きくなつて、もう葛籠に手がとどくばかりになった。こんどは「低すく、低すく」と唱えると、鬼婆はだんだんに小さくなつた。そこで和尚さんは思い切つて鬼婆を小さくして豆粒のように小さくなつたところを、囲炉裏にあぶつてあった餅の中にまるめて、ごびっと一のみにのんでしまつた。…和尚さんはにわかに腹がいたんで來たので雪隠に行くと、和尚さんのばばからたくさんのがとび出した。鬼婆が蠅になつて日本国中に出ていったけどというはなし。

第 12 番目は『一寸法師』である。

ある日、お姫さまは一寸法師をつれて、観音さまへお詣りに行きました。その帰り道で二匹の鬼に出会いました。鬼がお姫さまをつかまえようとしたので、一寸法師は腰にさしていた針を振りまわし、「おれを誰だと思うか、お姫さまのお伴をして観音さまにお詣りに來た一寸法師だ」と、大きな声でどなりました。すると、鬼は一寸法師を丸のみにしてしまつました。一寸法師は…刀をふりまわして腹の中をつっつきまわりました。鬼はおどろいて、一寸法師をはき出しました。すると、もう一匹の鬼が一寸法師をつかまえてひねりつぶそうとしたので、…鬼の目の中に飛び込み、…目をいやというほどついたので、鬼はとうとう逃げてしまいました。

一寸法師はすみの方でふるえているお姫さまをつれて帰ろうとすると、小さな槌が一つおちていました。…お姫さまが「これは打出の小槌といって、何でもほしい物が出る小槌だよ」と、教えました。

第 13 番目は『五分次郎』である。

五分次郎は…鬼が島征伐に行きました。…鬼が島の岩屋の上にのぼつて見ていると、鬼どもは赤鬼の組と白鬼の組に分かれていくさのけいこをしていました。五分次郎は岩屋の上から「赤が勝った、白が負けた」「こんどは白が勝つ、赤がまける」と、ひとりごとをいいました。鬼どもはどこから声をかけるのかわからないでいると、五分次郎はまた「赤かった、白かった」とつづけていでの、鬼の頭目ととうとう見つかつてしまつました。「おお、ここにこんな小僧がいる」といって、指のあいだにはさんでぐいっと一のみに飲んでしまつました。

五分次郎は針の剣をもつていたので、鬼の腹の中をくさくさとあっちこっちつき刺しました。鬼はたまらなくなつて、いたいいたいと苦しみ出しました。五分次郎は腹の中から、「宝物を差出して、降参すれば許してやる」というと、鬼は悲しい声で「どうか許してくれ」というので、許してやりました。そして鬼の頭の方に行くと、鬼は鼻のなかがむずかゆくなつて、くさんとくさめをしました。すると、五分次郎は鼻の穴から飛び出しました。

それから、鬼の宝物を馬につんで、自分もその上に乗つて家に帰りました。

第 14 番目は『笛吹聟』である。

(神さまの申し子の) 玉太郎は(天竺のお月さまの國の) 門の裏のところに出た。すると、そこに鬼どもが金の鎖にゆわえつけられていた。一匹の鬼は、玉太郎に「そのもってら(お月様からもらった千人力の出る) 米よ、一粒けでけろ」と、そういつた。玉太郎は「うん」といつてくれた。すると、その鬼は力がついて鎖をぶつと切つて逃げた。そして下の國さ来て、雨風吹かせて家もなにもみんなこわして、あねちゃをどことなくさらつて行つた。

玉太郎は…どことなく歩いた。そのあげくこれから川を越えれば鬼が島、手前は人間の島で、渡守がまぶ(守)つてゐるところに來た。…超えて行くと、一軒の家があつた。六十ばかりの爺と婆とがいた。

「泊めでけさい」と、そういうと、「いやいや、泊めでもさいいども、お前や泊まつたら、今

夜のうちにねも鬼にとられてしまうすかい、帰らさい」と、そういった。それでもきかないで、玉太郎はそこに泊めてもらった。玉太郎は笛を吹いた。するとほんに鬼どもが来た。玉太郎はもっていった一升の酒を出して、鬼どもにのませた。飲んだものんだ、それでも酒はすこしもなくならなかった。鬼どもはよっぱらって角も出し、牙もだした。鬼の大将も来ていた。「俺あ、今日これから、前の山ね相談ごとああって行かないばならないほどね、用ああつたらいつもの大太鼓たたけ」と、げご（下戸）の鬼にそういって出かけて行った。あねちゃん笛をききに来ていた。あさ、みんな睡ってしまったし、玉太郎はその下戸鬼に菓子を食わせて欺した。すると、「わあ、いまお前たち二人ば、百里はえ（走）る車さ乗へで、向い側さ越してやるほどね」とそういって、車をひっぱって来た。二人して乗った。…その大きな川を渡った。そして身づくりしていると、どんどんどんと大太鼓がなった。すると、鬼の大将が山から降りて来て、「にがしたな、にがしたな」といって、車をさがして、百里はしる車で追いかけて来た。だぶだぶと音を立てやって来た。そこで玉太郎のあねちゃんはどうにもならないで、「お月さま、助けでけさい」と願った。すると天上から鶴が一羽降りて来て、鬼の車にどんとぶっつかってくだけた。鬼の車はじゃくっと二つにさけて鬼の大将は死んでしまった。

第15番目は『鬼と三人の子ども』である。

（母親に奥山に捨てられた三人の子供の末っ子が）近くの木にのぼって見ました。そうすると、ずっと向こうの方に火が一つ見える、「あれ、あっちに火ん見える。さあ、歩べ」と、弟は木からおりて、二人の兄をはげましてその火を目当てに、だんだんたどって行って見ると、山の中に一軒のあばら家がありました。家のなかに一人の婆さんがひじろ（炉）に火をどんどん燃やしていました。

子供たちはその家へはいって「おいら道に迷って困るもんどうおけれ、こんや一晩とめてくりょう」とたのみました。婆さまは「泊めてやりたいはやまやまどうけんど、おらが家は鬼の家で、はいじきに鬼ん帰って来るころだから、とても泊めるわけにはいかん。こっちの道を行けば鬼に行きあうけんどそっちの道を行けば鬼にもあわんで行けるから、さあ、ちゃんと帰れ」といって、道まで教えてくれました。けれども兄弟たちは帰りかねて「…一ばん泊めてくりょう」と、また頼んでみました。婆さまは「いまに鬼が来れば、わいらあみんなとて食うがそんでもええか」といってるうちに、もう裏の方でしんしんと足音がして、鬼が帰って来るようでした。婆さまはあわてて…三人の子供をむろ（穴倉）に入れ、かたく蓋をして、その上に筵をかけておきました。

一足ちがいで、もう鬼が裏口から入って来たが、きゅうに鼻をふすふすさせて、「婆さんどうも人っくさい。きっと、誰か人間がとまっているら」といしながら、鬼は家のなかをほうぼう探しはじめました。婆さんは困って「いま表へ人間の子供が三人来て、こん夜一ばん泊めてくりょう」といってたら、むしょうに（急に）お前が裏から帰って来たもんだから、子供はあわてて逃げてしまった。人っ臭いというんじゃ、きっとその子供らの香いが残っているずらよ」というと、鬼は「ほうか、子供ん三人ときいちゃこたいられん。いま逃げようばかじや、たった一足おっかけろばつかまる。どれどれ」といながら、一足千里の靴をはいて、表口から鉄砲玉のようにとび出しました。ところが、……子供らしいのは見つからんので、「はてこれあ、子供らよりあ、俺ん方がとび過ぎたかも知らん。いまにきっとこの道い来るにちがいないから、少し休んでいて見ず」と、道端にすわって休んでいるうちに疲れが出て、ついぐうぐう睡ってしまいました。

婆さまは、鬼がとび出すとすぐに、…子供たちを裏口から逃がしてやりました。だんだん行くうちに、まるで雷さまでもなるように、ごうごうというえらい音がするから、何だろうかと思いながら行くと、向うの道の上に一匹のでっかい鬼がねていて、いびきをかいていました。子供たちはおっかなくておっかなくて、二人の兄いはまたしくしくと泣き出しました。すると末の弟が…ぬき足さし足して、そーっと鬼のようすをうかがっていました。

鬼は高いびきをかいてよく睡っていました。…弟は鬼をおこさないように、そーっと靴をぬがせました。ようよう片方だけ脱がせると、…鬼は「うむうむ鼠の野郎どもん夜なべに行くそはどう」と、寝言をいいました。…もう片方の靴を脱がせると、鬼はまたその足をぴくっとさせて、寝返りを打ちました。弟はまた息をころしていると、鬼は「うむうむ鼠の野郎どまあ、帰って来たそはどう」と寝言をいって、またすぐによく睡ってしまいました。…

鬼はじきに目をさまして「さては、餓鬼どもに逃げられとうか」と、はきしりしてくやしかり、そのあとを追いかけました。けれども一足千里の靴とられたので、とても追いつくことができない。子供たちは見るまに、人家のあるところへついたので、鬼はしかたなくすごすごと山へ帰って行きました。

（鬼の婆さまは子供たちが無事帰ったことを聞いて、）やっと安心しました。

第 16 番目は『大工と鬼六』である。

（大工が）川に行って、淵につきあたって流れる水を見ていると、水の泡からぶっくりと、大きな鬼が出てきました。そして「大工さん、なに考えている」とたずねました。大工が「橋をかけねばならぬ」というと、鬼が「お前の目玉よこしたらかけてやる」といいました。…

つぎの日に行って見ると、橋が半分かかっていました。またそのつぎの日に行くと、ちゃんと橋がかかっていました。すると、鬼が出て来て、「目玉よこせ」といいました。大工はおどろいて「待ってくれ」といって、あてもなく山に逃げて行きました。…

つぎの日また鬼にあいました。鬼は「早く目玉よこせ、もしも俺の名前をいいあてたらなら、目玉よこさなくてもよい」といいました。…一ぱん最後に、大工は大きな声で「鬼六」といいました。そうすると、鬼はぼっかり消えたということである。

第 17 番目は『南島のさるかに』である。

（まーやが桃の種を植え）六日目に実をとりに行きましたが、下枝はとられたが、上枝の実がとれないで、おいおい泣いていると、みつしらねき（植物）のところから、めくら坊主がやって来ました。…（この坊主は青い桃をまーやの籠に入れ、自分の籠にはうれた桃ばかりをいれた。）まーやは腹を立てて「おのれ、みくら坊主、…殺してやらねば」といって、追いかけて行きました。

すると、道ばたで唐鳩の旦那が歌をうたっていました。「唐鳩の旦那、…鬼が島へ力くらべしに行かじな」（唐鳩を誘い、それから百足、鰐、さい槌、ことい（雄）牛を誘い、鬼が島へ鬼退治に行く。）…

六人づれでみくら坊主の家へ行きました。…（坊主が）火を入れようすると、唐鳩の旦那がはねをばたばたさせたので、目にいっぱい灰が入りました。あわてて柄杓をとって目を洗おうとすると、百足の旦那に手をかまれました。それから座敷に逃げて上がって行くと、鰐の旦那にふみすべらかして、たたきたおされました。そのあいだに上からさい槌の旦那が落ちて来て、背骨をおられ、それからあわてて起き上がって門のところへにげ出すると、ことい牛の旦那につき殺されて死んでしまった。…

ここでは、悪者を鬼と呼んでいるだけである。

第18番目は『手なし娘』である。

継母はこれを見て「ああにくらしい」といって、「鬼とも蛇ともわけのわからない化け物が生まれた」と、書きなおして、そっと文箱の中へ入れておきました。…

若者は、早飛脚のもって来た手紙を見て、たいそう驚きました。けれども「鬼でも蛇でもよいから、私が帰るまで大切に育てて下され」という返事をかいて、早飛脚にもたせて帰しました。

第19番目は『立市買い』である。

与作は空家に入って般若の面をかぶって、藁や干草のなかにもぐりこんで寝てしまいました。しばらくたつと、何だかがやがやと人の声がしました。起きて見ると、いつのまにか十二三人の男たちが空家のなかに入って来て、焚火をどんどん燃やしながら、博奕を打ちはじめました。与作はあまり寒いので、焚火にあててもらおうと思って、般若の面をかぶったまま起き上がって火の方へ行きました。すると、大勢のものが博奕で夢中になっていたが、なにげなく振り向くと、思わず「鬼だ、化物だ」といって、われさきに争って逃げ出しました。

ここでは、得体の知れない恐いもの、化物のことを、鬼と呼んでいるが、特に与作がかぶっていた般若の面が鬼を想像させたのであろう。

これらと日本昔話大成を表にすると、89ページ以下になる。

第3章 Teufel と鬼の比較

1. 顔

鬼も Teufel も顔はよく分らない。顔の叙述がないに等しいからである。鬼に関しては、『桃太郎』に鬼が「大きな目から涙をぼろぼろとたらし」という語りがあり、『目一つ五郎』の鬼が「白い炎」の一つ目だという叙述があるだけである。他に「光る目玉」（『二人兄弟』の1例）、単に「（鬼の）目（をつぶした）」（『鬼の姉』の類話の1例）、「大口」（『食わず女房』と『三枚のお礼』の2例）という叙述があるが、「光る目玉」の鬼の正体は蜘蛛であり、後者の3例は鬼女に関してである。また「髪の毛をふり乱して目玉を光らした鬼婆」（『牛方と山姥』）とか「真っ白い銀の針金」のような髪の毛をし「大けな目の玉クルクルとむいで口が耳までさけて赤い舌出した鬼婆」（『牛方山姥』の類話の『馬子と鬼婆』）など、例外的に少し詳しい叙述もあるが、いずれも山姥に関してである。しかもより詳しい叙述の後者の山姥の正体は狸である。彼女達は鬼婆と言われているが、本来の鬼ではなかろう。結局、動物を除くと、目（4例）と口（2例）と鼻の穴（1例）と髪（1例）への言及があるだけである。本来の鬼については、目（4例、類話を省くと2例）と鼻（1例）と角（5例）と牙（3例）についての言及しかない。分析対象の日本昔話が166話もありながらある。Teufel にいたっては、顔の叙述はまったくない。

Teufel は Gott の対概念で、本来靈魂であり、形がないはずである。グリム童話でも、『ひょうきん者』や『土まんじゅう』では、Teufel は、Teufelsgespenster, Geister, der böse Geist と呼ばれており、靈魂である。また鬼も、もともとは隠（おん）から来たものだという有力な説もあるように、人の目には姿が見えないもの、靈魂であった。昔話、メルヘンは、詳しい叙述を極力避ける文学ジャンルであるが、鬼と Teufel の顔の叙述がないに等しいのは、こういう歴史的、宗教的、哲学的事実とも関係しているのであろう。

2. 風貌

鬼には角、牙以外に、爪（1例）、猿臂（1例）、出臍（1例）がある場合があるが、Teufel ではない。逆に、Teufel は馬の足（3例）をしていたり、醜い足（1例）をしているが、日本の昔話では、鬼の足に触れた話は『鬼のむこ』、『鬼と三人の子ども』、『三枚のお札』の三話しかない。他に、「ずしんずしんと足音がして」（『鬼と三人の子ども』のみ）という語りがあるし、相撲を取る鬼もいるし（『一寸法師』の類話1話のみ）、『天道さん金の鎖』の類話では、「手に油をぬり足を先にして登れ」と鬼を欺いているので、足はあるようだが、「頭を下にして登る」とか「頭を上にして登る」とか「尻を先にして登ったよ」のように、注意深く足への言及は避けている。Teufel の場合、15話の内4話も馬の足であったり、醜い足であったりする。また『3人の修行中の職人』では、馬の足を見ただけで Teufel と判断し、関わりを避けようとしているので、馬の足こそ Teufel の印だと言えよう。鬼は裸なのか、服装に関する叙述は一切ない。ところが、Teufel は緑の上着を着ていたり、豪華な衣装を着ていたり（prächtig gekleidet）、豪華な身なりをしている（reich gekleidet）ことがある。

3. 背丈

背格好は、鬼に大男の例が6話あるが、Teufel には大男は一人もいない。Teufel は、小さい場合が3~4例もあり、小人のイメージが強い。日本の昔話でも小さい鬼が出てくる話は5話あるが、『桃太郎』に「そこらにいた小さな鬼は大きわきして、奥の方へ逃げて行った」とあるように、大きな鬼と並んで、小さい鬼もいることに触れているだけで、小さい鬼はその他大勢の内の一要素に過ぎない。また鬼に子供も生れるが、子鬼や小鬼が昔話の主人公になったり、それらを鬼の典型として語っている昔話はない。鬼のイメージは大きいと言えよう。

4. 色

鬼や Teufel の色に関しては、鬼は赤鬼（21例）、青鬼（14例）、白鬼（2例）、黒鬼（6例）といろいろな色の鬼がいるが、Teufel は黒色（2~3例）しかいない。これは、後に述べるが、Teufel が黒、暗黒のイメージの地獄とのかかわりあいが深いからである。ただし、全体の色ではなく、部分的な色に関しては、Teufel は「火竜（ein feuriger Drache）」とか「赤い羽根の旦那（Herr mit der roten Feder）」と呼ばれているので、赤い場合もあり、金髪の Teufel もいるし、白髪の Teufel もいる。ちなみに、鬼の色を語っている限り、21話中21話すべてに赤鬼は登場する。つまり、鬼の色は赤が基本である。青鬼は、赤鬼と並んで登場し、青鬼だけで登場することはない。黒鬼と白鬼もいるが、赤鬼と並んで、あるいは赤鬼・青鬼と並んでしか出でこない。

5. 年齢

鬼の年はどうかというと、お年寄りがかなりいる女の鬼を除くと、鬼はすべて結婚適齢期か中年あるいは壮年のようにあり、お年寄りの鬼はない。そして鬼は退治の対象となるように、元気がよく、非常に強そうである。ところが、Teufel はお年寄りである場合が5例もある。そして鬼には子供の鬼も登場するし、子供をもうけることもあるが、Teufel が子供をもうけることはないし、Teufel の子供が出てくることもない。

6. 知力と腕力

Teufel は、小人の秘密の名前を知っていると思われたり、裁判官にも分らない殺人犯を知っていたり、涸れた井戸に水を湧き出させたり、黄金のりんごをならせたりする知恵のように、およそ人間には分らないようなことを知っていたりする。つまり、Teufel には、超能力というか、

超人間的、超自然的、超物理的な知識があるのである（5例）。ところが、鬼にはそういう知識も能力もない。むしろ日本の昔話に登場する鬼は、知識、頭の力というより、腕っ節の強さ、強い腕力の持ち主というイメージが強い。『地蔵浄土』、『夢見小僧』、『べに皿かけ皿』、『鬼のむこ』、『笛吹智』、『鬼と三人のこども』に出てくる鬼はみなそうである。『鬼が笑う』の鬼たちも、川の水を全部飲み込んでしまうほど豪傑である。このように、鬼は普通の人間ではとてもかなわない、怪物のような力の持ち主であるがゆえに、『桃太郎』や『一寸法師』や『五分次郎』のように、鬼を退治することがこの上なく賛美されるのである。鬼は腕力が強く、大きな体だが、頭は少し弱いということになろうか。この面に限れば、鬼は Teufel よりも、むしろグリム童話の巨人（Riese）に似ている。また人間にたやすく騙される点でも、鬼は巨人に似ている。

7. 性別

鬼と Teufel の違いの一つは性別である。恐ろしい怪物、不気味なもの、化物、不思議な現象を Teufel と呼ぶ場合の 4 例と言葉しか出てこない 2 例は別として、それ以外はすべて（15 例）Teufel は男であることが話の中で示されている。つまり、グリム童話には女の Teufel はないのである。もっとも、die Teufelin ないのでそれは当然ではある。ところが、日本の昔話には、女の鬼が 27 例も出てくる。その内訳は、鬼婆が 15 例、山姥で鬼婆が 2 例、鬼女が 1 例、酒呑童子が 1 例、その他単に鬼という表現が 8 例である。ところで、『鬼の妹』の鬼も一応女でしたが、鬼が妹を食い、妹に化けているので、厳密に言うと、鬼の性が女だとは限らない。次に、恐ろしいもの、おぞましいもの、化物、悪者が鬼と呼ばれている 3 例でも性別は不明である。さらに『百合若大臣』に、三つの米粒をいつまでも噛んでいるのが人間で、丸呑みにするのが鬼だと言って、人間と鬼の判別の仕方を教える場面があるが、この場合も性別はよく分らない。他にも、叙述がないので男女の判定ができない鬼の話はいくつもある。Teufel と違って、鬼に女がいるのが鬼の特徴であるが、鬼も圧倒的多数（65 例）が男である。

8. 持ち物

鬼と Teufel の持ち物であるが、鬼の持ち物は、打出の小槌（26 例：打出の小槌 21、宝箱 2、望みの小箱 2、葛籠 1）、宝物（20 例：宝物 18、宝箱 1、虎の兵児 1）、万里車（10 例：万里車 3、千里車 3、千里棒 1、千里靴 2、百里車 1）、沢山の御飯が炊ける杓子（8 例：（金の）杓子 3、金の箸 1、釜 1、赤、青、白の米粒 3）、金銀（8 例：金（銀）3、金銀・珊瑚 1 例、黄金箱 1、金の椀 1、金の杓子 1 例、金の道具 1 例）、隠れ蓑・隠れ笠（7 例）、生き鞭（6 例：生き鞭 4、生き針 1、生き棒 1）、死に鞭（5 例：死に鞭 4、死に針 1）、蔵（5 例：穀蔵、種子蔵、蜜蔵、宝蔵、蔵の鍵）、飛び蓑・飛び笠（2 例）、鐘（1 例）、聴耳（1 例）、満ちやま・しちやま（1 例）、泉井と泉（1 例）、鬼の生肝（1 例）である。金を持っている鬼は 15 例（お金・銭 11、大判小判 2、銭槌 1、万両舟 1）である。これは多いように思えるが、類話を省けば 166 話中 5 話に過ぎない。それも、人から奪ったのか、あるいは蓄えたのか、鬼のお金はいわば蓄財である。ところが、Teufel はお金を無尽蔵に持っている。それは、ポケットの中に手を突っ込めば、いつでも金が一杯出てくるように、必要な時必要なだけ湧き出てくるような性質の金なのである。それが 21 話の内 10 例もある。Teufel の半数である。Teufel が比喩や言葉としてしか登場しない 7 篇を除くと、銭金を持つ Teufel は 7 割強にもなる。他に持っているものは、財宝（Gut）と宝物（Schatz）（1 例ずつ）であるから、Teufel は持ち物という面に限れば、非常に現実的、世俗的である。それに比べて、鬼の持ち物は、打出の小槌や宝の杓子、宝箱など、いつでも欲しいものが何でも手に入ったり、万里車や飛び蓑・隠れ蓑、生き鞭・死に鞭や聴耳など、あつと

いう間に遠くへ飛んで行ったり、透明人間になったり、人を殺したり生かしたりしたりと、摩訶不思議な体験をしながら、願いが瞬時にかなったりして、夢がある。Teufel の錢金は、直接的で、露骨で、剥き出しで、メルヘンなのに夢がない。ところが、鬼のお金の中には、「錢槌」とか「万両舟」のようなものも含まれているが、これらは直接的な錢金でなく、富を想像力で思い浮かべさせるような金であり、ここにもかすかな夢がある。Teufel の中に打ち出の小槌のような鞭を持ったものが一匹だけいるが、それとて叩いて出てくるのは錢金である。それから Teufel のなかには、贅沢や快樂を与えてくれるものもいるので、この面からも Teufel は世俗的であると言える。もっとも、これは財産に限った話である。Teufel は閻魔帳を持っていたり（2例）、入ったら出られなくなる袋を持っていることもあり（1例）、Teufel が異界の存在であることに変わりはない。正確に言えば、Teufel はお金や贅沢、快樂という世俗的な魅力をちらつかせて、人を誘惑し、人や人の魂を奪おうとする異界の存在だということである。鬼は、そもそもお金を持っていない方が圧倒的に多いし、たとえ金や宝物を持っていても、それをちらつかせて、人々を誘惑するようなことはない。むしろそれらは、騙されたり（『地蔵浄土』、『夢見小僧』）、退治されたりして（『桃太郎』、『一寸法師』、『五分次郎』）、奪われる運命にある。総じて、打出の小槌、宝物、お金、財宝、生き鞭、死に鞭など鬼の持ち物は、虐げられた人、貧しい人、心優しい人、正直者を幸せにする、異界からの贈物と言える。

9. 出会う場所

人間が鬼や Teufel に出会う場所は非常に様々である。一言で言って、鬼も Teufel もどこにでも現れると言える。しかし、鬼と出くわす場所は、山（47例：山中の家8、山の穴3、峠2、山の地蔵堂3、山の神の堂2、山の鬼の家2、山の神屋1、峠の宮1、山寺1、山の清水1、山間の林1、山道1、木の洞1、山の鬼婆の家1等）、人家か人家の近く（22例：村の家2、野原1等）、村もしくは村周辺（16例：花見2、村の橋、村の峠、村はずれ、山村、里、田、畑、清水坂各1等）鬼が島（13例：海の鬼が島4、川向こうの鬼が島2、山の鬼が島1、野の地下の鬼が島1等）、地下の穴の中（9例：鼠の穴3、土間の隅穴1等）、宮参りの途上（6例：觀音さま参り3、清水觀音参り1、八幡様参り1、宮参り1）、木の周辺（3例：木陰1、杉の洞1、阿檀の茎）、天上（3例）、地獄（3例）、川（3例：川の側1、川の泡1、沢1）、水中（1例）、鬼の岩屋（1例）、鬼婆の家（1例）、どこか知れぬ一軒家、空家、爺の家（各1例）である。もちろんどこで会うかわからない話も少なくない。Teufel と出くわす場所を多い順番で示せば、森（3例）、畑（3例）、お城（2例）、道（2例）、地獄（2例）、荒野（1例）、墓（1例）である。しかし、ここにも鬼と Teufel の違いがある。鬼は、家や家の近く、または村や村周辺、宮参りの途中、木や川の側、川の中など人々の生活圏に現れるのがほとんどであるが、Teufel が生活の中心である家の中に現れる事はない。穴の中ですら、日本の昔話では生活圏にある。また日本昔話の山は、グリム童話の森と違って、山の神がいるものの、それほど異界の雰囲気はない。実際鬼に出くわす山の場所を細かく見ていくと、峠、地蔵堂、神の堂、神屋、宮、山寺、山道、林など人々の生活とかかわりの深いところが多い。

10. 住処

鬼が住んでいる所を多い順に挙げると、山（36例：山中の家10、鬼の家5、鬼の棲家1、鬼の岩屋1、鬼の宿1、大江山1、穴4等）、鬼が島（19例：海の鬼が島4、川向こうの鬼が島2、川下の鬼が島1、側に水のある鬼が島3、天上の鬼が島1、穴2等）、鬼の家（14例：鬼の家6、鬼屋敷1、鬼の館1、鬼の岩屋1、鬼婆の家5）、穴（6例：鼠の穴2、樹の根元1等）、天上（4

例)、地獄(3例)、天竺(2例)、川(2例)、村(1例)、野原の地下(1例)、猿家(1例)である。Teufelの住んでいる所は、住処が分っているメルヘン6篇の内、地獄が5例とほぼすべてである。残りの一つは森の中の岩小屋である。Teufelが岩穴に逃げ込んだというメルヘンもあるが、そこがTeufelの住処かどうかはっきりしない。鬼の多くは鬼が島という特別なところに住んでいるが、特別といっても、鬼が島の島とは、単に人間の支配がおよばない所か、鬼が支配している限られた狭い地域というくらいの意味合いが強く、異界であるには違いななかろうが、その異界は地上的、現実的である。この意味では、鬼が島はかすかに異界の雰囲気も漂う山中の鬼の家とさほど大差はない。例えば、『桃太郎』の鬼が島は、桃太郎が鬼退治のために山奥に入って行き、「宝物を車につんで」家に帰るので、山奥にあるのであろう。『夢見小僧』の鬼が島は、海か湖か川中の島で、「竜宮」と「地獄極楽」に対置された所である。『五分次郎』の鬼が島も五分次郎が「鬼の宝物を馬につんで」帰るので、陸上のどこか(岩場)にあるのであろう。『笛吹聟』の鬼が島は川向こうにあり、川の此岸は人間の島である。『鬼が笑う』では、鬼が島ではなく、「川向こうの鬼屋敷」と言われているが、『笛吹聟』の鬼が島と余り大差はない。このように、鬼が島とはいうものの、日本の昔話では余り異界のイメージは強くない。ところが、グリム童話の地獄となるとそうはいかない。これはまったくの異界であり、現実の人間的世界ではないし、地上の世界でもない。地獄は、天国に対置された、極めてキリスト教的な世界である。もちろん、仏教にも地獄の概念があり、鬼が責め苛むことになっているし、そういう話もたった1話だけだが『日本昔話大成』にあるにはあるが、極めて例外的であり、鬼を特徴づけるものとなっていない。グリム童話の場合は、地獄は一般的であり、キリスト教と切っても切れない関係にある。その地獄にTeufelは住んでいるのだ。そればかりか、Teufelは地獄の主、支配者なのである。日本の昔話で注目すべきことは、鬼が島が地獄と区別されていることである。例えば、『夢見小僧』で、「わしどは三人で賭けをして、一人は竜宮に、一人は地獄極楽に、俺はここ(鬼が島)へ来て宝物を見て帰る約束をした。」と語られておるところ、鬼が島は、地獄とも極楽とも違うのである。地獄に住むTeufelが極めてキリスト教的雰囲気を感じさせるのに対し、鬼に余り宗教的な香りがしないのは、これも一つの理由であろう。

11. 好き嫌い

鬼に見られないTeufelの特徴は、Teufelは輪や清いもの、清らかなもの、そして神様と光が嫌いだということである。そして不潔なものを好む。例えば『手なし娘』では、Teufelは、体を洗って清潔にした娘が輪の中に入ると、娘に近づけないし、泣いて涙で濡れないと、娘を連れて行くことを諦めてしまう。「涙を流さないことも魔女の印であった。『涙は罪を洗い清めるのにふさわしいものだから』(ボゲ) というのが悪魔学者の考えたもっともらしい理屈であった』(『魔女幻想 呪術から読み解くヨーロッパ』度会好一著、中公新書、S.128) ということと関係があるかもしれない。『黄金の山の王様』でも、商人と息子はTeufelに連れて行かれないように輪の中に入る。『熊皮男』では、Teufelは主の祈りを禁止する。そして『土まんじゅう』では、Teufelは「日の出の最初の光が天にさす」と、「大きな叫び声をあげて逃げ出」す。『Teufelの煤だらけの兄弟』では、Teufelは、兵隊さんが7年間体を洗うこと、髪をとくこと、髪を刈ること、爪や髪を切ること、涙を拭くことを禁止するし、『熊皮男』でも、Teufelは、兵隊さんが7年間体を洗うこと、髪と髪をとくこと、爪を切ることを禁止する。つまり、不潔なままでいろ、ということなのである。鬼はかまいたちを恐れたり(『地蔵浄土』)、鼠を怖がったり(『牛方と山姥』)、蓬と菖蒲を避けたりする(『飯くわぬ女』)。蓬と菖蒲に触れると、鬼(婆)

の体が溶けたり、腐ったりする。Teufel の好悪に宗教的香りが漂っているのに対し、鬼の好き嫌いはどこか人間的でかわいらしい。

12. 契約

鬼と Teufel の振舞いにも若干相違がある。Teufel はお金をちらつかせて、一生涯金持ちにしてやるとか、裕福な暮らしをさせてやるとか、快樂を与えてやると言って誘惑し、契約を結ぼうとする。単に条件を提示したり（7話）、約束し（versprechen）たりする（2話）だけではない。証書で譲渡を約束し（der Müller verschrieb es dem fremden Manne.）たり、署名入りの証文を渡したり（Handschrift und Siegel）、帳面（閻魔帳）（Buch）に名前を書き込んだり、Teufel と結託（契約）を結んでいた（weil er mit dem Teufel im Bund gelebt hätte.）り、署名し（Dann hielt er ihnen ein Buch vor, in das mußten sie sich alle drei unterschreiben. や Unterschriften）たりしている。つまり、悪魔は契約を狙っているのである。このような Teufel が登場する話が 10 篇もある。半数以上である。

日本の昔話の鬼のなかにも、娘を嫁にくれるなら洪水の川を渡してやるとか、目玉をくれるなら橋を架けてやると条件を提示して、目的を達成しようとする鬼も 2 話だけだが、いるにはいる。しかし、署名、証書などを求め、契約を結ぼうとする鬼は一匹もいない。

13. 貧者へ接近

Teufel は無尽蔵にお金を持っていると述べたが、Teufel はそのお金をちらつかせて、貧しい人々に接近してくる。『手なし娘』では Teufel は貧乏になった粉屋に、『洗礼立会人の死神』では貧しい男に、『Teufel の煤だらけの兄弟』ではお金がなく飢えた退役の兵隊に、『熊皮男』でも一文無しの兵隊に、『3 人の修行中の職人』では無一文の 3 人の職人に、『Teufel とそのおばあさん』では脱走して飢え死にしそうになった兵隊に接近してきて、お金持ちにしてやると、話を持ちかける。このように、Teufel は貧しい者と取引し、契約を結ぼうとする。鬼は、人の妻になったり、母親や妹に化けたり、花嫁を済いに来たり、困った人を助けて娘を取ろうとしたり、小僧を取って食おうとしたり、お姫様を済おうとしたり、嫁さんを済ったり、橋を架ける代わりに目玉を取ろうとしたりするが、一文無しで、切羽詰ってどうしようもない者の弱みにつけ込んで取引しようとする事はない。そもそも鬼には、Teufel のような取引の成立を可能にするような物的な裏づけがないというのが実情に近い。

14. 魂

鬼と Teufel の振舞いで、それ以上に大きな根本的な違いは、Teufel は鬼と違って人間の魂を狙っていることである。契約はその目的を達成するための手段である。これは神学上の Teufel の概念とも一致する。そのようなメルヘンが 6 篇もある。『熊皮男』では Teufel は素行の悪い姉二人の魂を取り、『3 人の修行中の職人』では殺人犯の悪人の魂を取ることに成功する。『Teufel とそのおばあさん』では 3 人の脱走兵の魂を取ろうとするが、失敗し、『土まんじゅう』では神様に背くような行為をしてきたが、死の直前になって自分の行いを悔い改めた金持ちの魂を取ろうとして失敗する。『鍛冶屋と Teufel』でも、Teufel は鍛冶屋に「名前を帳面（地獄の閻魔帳）に書き込めば、10 年間楽な暮らしをさせてやる、その後はお前は俺のもので、連れて行く」と言って、地獄へ連れて行こうとする。『Teufel の煤だらけの兄弟』でも、兵隊さんに、7 年間仕えれば、一生金持ちにすると言い、兵隊さんを地獄へ連れて行く。この話は、一見魂を取るように見えないが、地獄の従僕生活には禁止事項があり、それを犯すと命をとられるので、やはり魂が狙われていると考えられる。しかし、日本の昔話には、魂を奪ったり、魂

を狙ったりする鬼は一匹も登場しない。これは、Teufel がグリム童話でも地獄の主であるのに対し、鬼は日本の昔話では地獄の主ではないし、そればかりか地獄とまったくと言っていいほど関係がないことと深くかかわっている。このように、グリム童話の Teufel は人間の魂を狙っているが、これは、神学的には、人々の魂のなかで最も大切なものの、神＝キリストへの帰依、信仰心、魂の魂を奪うことを意味する。だから Teufel に魂を奪われた者は堕落した者であり、地獄へ落ちるのである。こんな役割を担った鬼は日本昔話には一匹もいない。繰り返すが、そもそも鬼は日本昔話では地獄と無関係なのである。この点でも、日本の鬼は、地上的、現実的、非宗教的で、この世に、現世に関心があるが、グリム童話の Teufel は、地下的、異界的、キリスト教的で、主として死後の世界に関心がある。

15. 神との関係

『Teufel の煤だらけの兄弟』では、Teufel が宿屋の主人に、盗んだものを返さなければ地獄へ連れて行くと言って恫喝し、宿屋の主人に盗んだものを返還させる。『熊皮男』では Teufel は素行の悪い姉 2 人の魂を取ったり、『3 人の修行中の職人』では冤罪を防ぎ、真の殺人犯を裁いて処刑し、その魂を取ったり、『土まんじゅう』では神様に背くような行為をしてきた金持ちの魂を取ろうとしたりしている。つまり、Teufel には悪人に恐怖感を抱かせ、悪行を諫止したり、悪人を罰する側面があるのである。Teufel の善良な側面である。善人を神様が引き受けるとすれば、悪人を Teufel が引き受けているのである。いわば、神と Teufel の分業である。歴史的にも、現実にも、慈悲と怒りの二面性を持つ神（々）がいたし、いるのと同様、善と悪の二面性を持つ Teufel もいたし、いるのである。日本の昔話には、頓馬な鬼は登場するが、このような神様と分業をする、いわば神様の分身のような、善玉の鬼は登場しない。もっとも神様の命令を実行したり（『瘤取爺』）、神様の使い走りをしたり（『瘤取爺』）、地蔵の使いをしたり（『地蔵浄土』）、荒神や火の神に従ったり（『馬子と鬼婆』）する鬼はいる。

16. 人との交わり

鬼（ただし男の鬼）は花嫁を渋っていって子供をもうけたり、娘を嫁に取ったり、人の妻を渋って行ったり、お姫様を渋おうとしたりする。こういう話が日本の昔話には 22 例もある。Teufel はこのようなことはしない。一つだけ、Teufel が零落れた粉屋に、水車の後ろに立っているものをくれると約束するなら金持ちにしてやると言って、娘を取ろうとする『手なし娘』の例がある。しかし、この Teufel の意図は、『黄金の山の王様』に出てくる Teufel が商人に、家に帰って最初に脚にぶつかるものをくれるなら金を欲しいだけやると言って、商人の息子を採ろうとした場合と同じく、娘を嫁にしようとして連れて行こうとするものではない。恐らく、敬虔な（fromm）娘を堕落させ、その魂を奪おうとしているのであろう。このことは、娘が堕落するどころか、いつまでも清らかな（rein）ままでいるので、Teufel は手を出せず、逃げて行ったところに表れている。Teufel は堕落した者や悪者の魂を狙っているのである。ところが、日本の昔話の『鬼が笑う』に出てくる鬼は、渋って行った花嫁から「身持ちになった」と言わると、喜んで馬鹿騒ぎをする。『鬼のむこ』でも、鬼は、「おなごだち」に、川を「渡して」やるかわりに、「娘を一人」「おれの嫁にやるのだぞ」と言って、娘を嫁に取る。そして娘を取った鬼は「嫁かなとったい、とったい」と言って得意になる。またお姫さまをつかまえようとした『一寸法師』の鬼も、「あねちゃ（玉太郎の嫁）」を渋って行った『笛吹聟』の鬼も、恐らく自分の嫁にするのが目的である。さらに、渋って行った女人との間に子供をもうけた鬼もいる（『鬼の子小綱』など）。鬼は明らかに人と交わっている。このように、鬼は、Teufel が穢れ

た者や悪者の魂を狙っているのに対し、生身の人間とか肉体を狙っている。この面でも、鬼は現実的、人間的であり、現世に関心があるが、Teufel は来世的、宗教的であり、来世に関心がある。

17. 人食

鬼と Teufel は、人間臭いと言ったり、人間を実際に食いそうだという点で、共通しているように見える。しかし、この問題も注意深く観察すると、大きな違いがある。グリム童話で、Teufel が人間を食いそうに思われるメルヘンは『3 本の黄金の髪の毛の生えた Teufel』だけである。たった 1 例しかない上に、この Teufel は「Ich rieche rieche Menschenfleisch, 人の肉の匂いがするぞ。」としか言っていない。この Teufel が実際に人間を食う描写はない。その Teufel の言ったことに対し、Teufel のおばあさんが「Immer hast du Menschenfleisch in der Nase! お前ときたらいつも鼻先に人の肉がくっついているんだから。」と答える。このやりとりから判断して、この Teufel は人間を食うと想像できる。ところが、日本の昔話の鬼は想像だけではなく、明らかに人を食う。男の鬼では、『夢見小僧』の鬼の大将は、小僧を「肴切りにしてもって来い」と言う。『べに皿かけ皿』では、鬼の婆さまがべに皿かけ皿に「息子は二人とも鬼だよ。いまに帰って来て、喰われるよ。」と言う。二人は実際に喰われそうになったが、米を噛み碎いて口の周りに塗って、死んだまねをしていると、鬼が「腐っている」と言って、通り過ぎて行く。『鬼と三人の子ども』では、婆さまが「鬼が来れば、…みんなとて食うがそんでもええか」と言う。鬼の方も「ほうか、子供ん三人ときいちゃこたいられん。」と言う。鬼が子供をいかにもおいしそうに食べる光景が目に浮かぶ。これらの鬼は人を食いそうなだけでなく、実際に人を食う習慣があることが語られている。女の鬼はすべて人を食う。『牛方と山姥』では、鬼婆は牛方を食おうとして追いかける。『三枚のお札』の鬼は、和尚さん所の小僧を取って食おうとする。小僧は、実際に食われることは免れるが、食われる、食われる、と言って、逃げ惑う。『鬼の妹』の鬼は、主人公の両親と村人全員を食ってしまった。そればかりか、日本昔話には、鬼が人を食う場面の描写もある。『ツキナウシナ』では、「鬼どもは担いできた人間を刺身にして食べ始めた。」とある。『飯くわぬ女』では、鬼が「友だちを頭からがしがし食いだしました。」と語られている。これは、人を食べるのではないかと単に想像させるに過ぎない、グリム童話の Teufel と比べると、大きな違いである。このグリム童話の特徴は、メルヘンというジャンルに固有の特質だというだけでなく、Kannibalismus（人肉食い）を禁忌しているキリスト教の強い影響があったためであろう。日本の鬼は『日本の昔ばなし』の 19 例の内、8 例もしくは 9 例で、『日本昔話大成』では類話を省いた 147 話中 68 話で、人を食うか食いそうである事実からして、人を食うのが鬼の特徴の一つと言えよう。

18. 末路

日本の鬼は、熱湯で殺されたり（『牛方と山姥』）、蓬と菖蒲で体が腐って死んだり（『飯くわぬ女』、殺されかけて命乞いをしたり（『桃太郎』）、虎にかみ殺されたり（『鬼の妹』）、急流に流れされ悲鳴を上げながら死んだり（『鬼のむこ』）、和尚に食われたり（『三枚のお札』）、潰されたり（『鬼を一口』）、死に鞭で殺されたり（『馬の子殿』）、焼き殺されたり（『瓜姫子と天邪鬼』）、皆殺しにされたり（『二人兄弟』）と、殺されたり、退治されたりするが、Teufel が殺されることはない。たった 1 話の例外を除いて。それは『ひょうきん者』である。この話では、Teufel が何匹か撲殺されるが、1 匹は地獄へ逃げ帰る。殺されたのはすべて Teufel の子分たちである。そして地獄には Teufel の親分が何の危害も加えられることなく平然としている。Teufel は殺される

のではなく、敗北するのである。その理由として、鬼が Teufel に比べてより人格化、人間化されており（喜怒哀楽があったり、人と交わり子をもうけたり、家族がいたりすること等々）、生と死がよりはっきりしていること、Teufel と違って、鬼は鬼が島や山に住んでおり、地獄と殆ど関係がないし、ましてや鬼は地獄の主ではないこと、地獄の主は閻魔王であり、鬼は閻魔王に仕えているに過ぎず、鬼が死んでも、この世の秩序もあの世の秩序も変ることなく保たれること、むしろ惡の象徴でもある鬼には死んでもらった方が、この世の平和が保たれること、対照的に Teufel は、神（善）の対極にある惡そのものであるが、同時に地獄の主なので、Teufel に死なれては、地獄の秩序が保てないという事情があろう。事実、『鍛冶屋と Teufel』というメルヘンでは、Teufel が神様に、ならず者の鍛冶屋を地獄へ受け入れるなら地獄を治めることができないので、どうか天国に受け入れてくださいとお頼みしている。グリム童話では、神学と同じく、神様の善の領域（天国）と Teufel の惡の領域（地獄）がはっきりと分かれており、かつどちらも必要不可欠なのである。ちなみに、グリム童話の魔女は、神学上 Teufel と契約しているとされているにもかかわらず、地獄とも関係ないし、地獄の支配者でもないせいか、ほとんど（17 篇中 10 篇）が残酷な最後を迎える。

19. 別称

Teufel は竜と言われている場合が 3 例あるが、鬼が竜である話は、日本の昔話には一つもない。ただし、日本の昔話には、「ふいに空からまくろい雲がおりてきて、花嫁の駕籠をつんできました。…黒い雲は駕籠のなかの花嫁をさらってとんで行ってしまいました。」（『鬼が笑う』）というように、鬼が雲になって現れる、つまり、空中を飛ぶような話はある。ちなみに、ドイツ語の Drache（竜）には Teufel の意味もある。

Teufel は、別称として、竜以外に、der Böse（悪者）、der Schwarze（黒い奴）、der Unhold（怪物、醜惡者）、der böse Geist（悪靈）、die Füchse（狐）と呼ばれている。Teufel には、惡、暗黒の夜、怪物、醜いものといったイメージがつきまとう。実際、『フリーダーとカーターリースヘン』や『小農民』や『7人のシュヴァーベン人』では、得体の知れぬもの、不気味なもの、恐ろしい怪物のことが Teufel と言われている。また Teufelsgespenster と呼ばれたり、Geister と呼ばれたりしているように、Teufel は靈魂、精靈、幽靈、妖怪でもある。Teufel が幽靈、妖怪であり、また地獄の主であることが、得体の知れぬもの、不気味なもの、恐ろしい怪物が Teufel と同一視される根拠となっている。

これに対し、鬼には別称はない。また、歴史は別として、日本昔話の鬼には、Teufel のような暗黒の夜、醜いもの、靈魂や幽靈のイメージもない。しかし、『南島のさるかに』、『手なし娘』、『立市買い』で、悪者や化物が鬼と言われているように、鬼には悪者、化物のイメージはある。

20. 神の対概念

最後に、鬼と Teufel の最も大きな違いは、Teufel が神の反対概念、対概念であるのに対し、鬼は仏や神々の対概念ではないということである。しかも、グリム童話には、Teufel と神の対立を前面に押し出したメルヘンが 5 篇もある。

例えば、『手なし娘』というメルヘンの手なし娘と Teufel の闘いは、神と Teufel の闘いともなっている。手なし娘の側に神様がついているからである。例えば「Die Müllerstochter war ein schönes und frommes Mädchen und lebte die drei Jahre in Gottesfurcht und ohne Sünde. 粉屋の娘は美しく敬虔な娘で、その 3 年の間、神様を敬い、罪を犯すことなく過ごしました。」と、まず手なし娘が神様を敬っていることが示される。そして手なし娘が Da kniete sie nieder, rief

Gott den Herrn an und betete. Auf einmal kam ein Engel daher, と、神に祈ると、神は願いを聞き入れ、天使を遣わし、救いの手を差し伸べる。また Teufel の策略により殺される運命となつたお后様（手なし娘）が母親の助けで逃げ出した時も、お后様は天使に守られて生き延びる。また、妻（お后様）と子供を捜しにかけた王様は、7年ほど飲み食いしないが、神様が生かしてくれ（Gott erhielt ihn.）、死ぬことはない。さらに die natürlichen Hände hat mir der gnädige Gott wieder wachsen lassen というように、神様は切り取られたお后様の手も生やしてくれる。最後に、Da speiste sie der Engel Gottes noch einmal zusammen と、神様は王様とお后様に食事も用意して、生きながらえさせてくださる。このような手なし娘を Teufel が済おうとしたり、殺そうとしたりするが、ことごとく失敗する。背後に神様がいらっしゃるからである。メルヘンの最後で、王様は妻の手なし娘に会うことができ、結婚式をやり直し、幸せな人生を送る。これは、手なし娘（従って神）が Teufel に最終的に勝利したことを意味している。

『熊皮男』では、兵隊さん（熊皮男）の生き方は神様に愛されるものとして描かれている。そのような箇所を列挙すると以下のようになる。

Wer ihn (den Soldaten) sah, lief fort, weil er aber allerorten den Armen Geld gab, damit sie für ihn beteten, daß er in den sieben Jahren nicht stürbe,

Er (der Soldat) hatte ein mitleidiges Herz,

‘Bitte aber Gott, daß er mir das Leben erhält.’

Der Bärenhäuter aber zog in der Welt herum, von einem Ort zum andern, tat Gutes, wo er konnte, und gab den Armen reichlich, damit sie für ihn beteten.

Da sprach er ‘ich bin dein verlobter Bräutigam, den du als Bärenhäuter gesehen hast, aber durch Gottes Gnade habe ich meine menschliche Gestalt wiedererhalten, und bin wieder rein geworden.’

熊皮男が生きながらえたのは、祈りのできない自分に代わって他の人々がお祈りしてくれたからであり、彼が「憐れみの心」を持っていて、神様の思し召しにかなつたからである。一言で言えば、神様のお陰で彼は生きのびることができたのである。しかも、最後で「神様の御慈悲で、私はまた人間の姿を取り戻せました」と言っているように、熊皮男が人間の姿に戻ることができたのも神様のお陰なのである。神様が熊皮男の側について、彼は生きながらえることができた、ということは、Teufel の側からすると、死んだ彼の魂を奪うことができなかつたということである。兵隊さんと Teufel は、手なし娘と Teufel のように、直接闘うことはしない。しかし、Teufel が兵隊さんに接近してきた目的は、彼を神の道からそらせ、彼の魂を奪うことであった。ところが、兵隊さんは神の道に背くことはしなかつた。神様は兵隊さんの慈善的な善行を認め、彼を Teufel の手に渡さなかつた。兵隊さんをめぐる、神と Teufel の争いである。このように『熊皮男』は、兵隊さんという主人公の生き方を通じて、神と Teufel の闘いを描いているのである。結果は明らかだが、Teufel の敗北に終わる。神が勝利する。Teufel は姉2人の魂を奪うが、これは何も Teufel の勝利ではない。姉2人の振る舞い、生き方は、神に見捨てられたものだからである。あくまで神の勝利は搖るがない。

『主の動物と Teufel の動物』には、神と Teufel の次のような争いがある。山羊が果物のなつている木をかじったり、ぶどうのつるに損害を与えたり、柔らかい草を台無しにすることで、神様は狼をけしかけ、Teufel の創造した山羊を殺してしまつた。これを知つた Teufel は、神様に多大の弁償を要求した。神様は櫻の木の葉が落ちたらすぐ払うと言って、Teufel を騙し、賠償

を逃れる。この争いで、神様が Teufel になぜ害を与える動物を作ったのかと聞くと、Teufel は「自分自身が害を与えることばかり考えているので、私の創ったものは、それと違う性質を持つことができなかったのです。」と答える。Teufel は人や物に害を与える存在であり、神（Gott der Herr）はその逆であることが示される。

『土まんじゅう』というメルヘンで、墓の下に眠っている者は、お金持ちの農夫（ein reicher Bauer）である。ある日、その農夫の心の扉を叩く（Es klopft an die Türe seines Herzens.）者があり、「hast du den Deinigen damit wohlgetan? hast du die Not der Armen angesehen? hast du mit den Hungrigen dein Brot geteilt? War dir genug, was du besaßtest, oder hast du noch immer mehr verlangt?」と言った。つまり、この農夫は神様から警告を受け、その3日後に死んだ人なのである。だから、Teufel がやって来て、「この墓の下にいる者はわしのものだ」と言って、魂を奪おうとしたのである。しかし、彼は死ぬ3日前に少し悔い改め、隣の貧しい農民に穀物（Korn）恵んでやっている。このため、最終的には、彼の魂は Teufel に奪われなかったのである。もちろん話の上では、怖いもの知らずの兵隊さんの狡知のお陰ということになっている。このメルヘンでも、神様のなさること、神様のお気に召すことには、Teufel は手出しができない。

『Teufel の煤だらけの兄弟』では、Teufel は地獄で極悪人を釜でゆでている。神が天国で善人の魂の至福を約束していることを考えると、Teufel は神と好対照をなしている。このことは、Teufel が取引を持ちかけると、『熊皮男』の兵隊さんは「Wenn mirs an meiner Seligkeit nicht schadet,」と答え、『3人の修行中の職人』の職人は「wenns unserer Seele und Seligkeit nicht schadet,」と答え、Teufel と取引するなら、神様から見捨てられ、天国を手に入れることが出来なくなるのではないかと、不安に思っていることによく表れている。

『鍛冶屋と Teufel』でも、神と Teufel の対立の構図を見て取ることができる。多くの裁判沙汰を起こし、金使いも荒く、無一文になって首をくくろうとした鍛冶屋はいわばごろつきであり、Teufel がやって来て、契約を持ちかけ、その魂を取ろうとしたのは極めて自然である。ところが、鍛冶屋が死んで、天国へ行こうとしたら、悪魔と契約を結んだことがあるので、使徒ペートゥルスに天国入りを拒否される。これも自然である。そこで鍛冶屋は地獄へ行くが、鍛冶屋が地獄でも騒動を起こしそうなので、地獄入りも Teufel に拒否される。これに腹を立てた鍛冶屋は、Teufel 達の鼻や耳を地獄の門に打ち止めてしまう。これに困った年寄りの Teufel は天国へ行き、神様に鍛冶屋を面倒見て欲しいと頼む。神様とペートゥルスは、Teufel を早く追い払いたかったため、止むを得ず鍛冶屋を天国に受け入れる。ここで、老 Teufel が、ならず者の鍛冶屋を地獄へ受け入れるならば、「er sei nicht mehr Herr in der Hölle 私はもう地獄を治めることができません」と言っているように、地獄を治める、地獄の主（Herr）は Teufel であり、天国を治める、天国の主は神なのである。神と Teufel は対極の主なのである。

以上、神と Teufel は直接闘ったり、誰かをめぐって間接的に闘いを繰り広げたりする。そして神は天国を治め、Teufel は地獄を治める。神と Teufel は対極にある。しかし、鬼は人間を襲ったり、人間と闘うことはあっても、鬼が、直接的であれ間接的であれ、神や仏と闘ったりすることはないし、地獄の主になることもない。

ゲリム童話の Teufel

Teufel の出てくる童話	類	風貌	背丈	色	年齢	知識	性格	脳齧い	服装	好み	特徴	食べ物	飲み物	出合は所	すみか	持ち物	家族	仲間	性別	別称	警え、比喩	
29 Der Teufel mit den drei goldenen Haaren		金髪 黒かいる			老人	怪奇現象をも 知る物知り		人を殺す。人を食べる。 夜归り、夜、朝出かけ る。			恐怖の対象	酒	地獄	川向こうの 地獄	お婆さん		男	den alten Drachen				
31 Das Mädchen ohne Hände					老人 ein alter Mann			水車の後の物と金との 交換の約束。	清潔、潔、輪 を嫌う	神に負ける 恐怖の対象			森	金 reich, Reichtum			男					
44 Der Gevatter Tod								人を殺そうとする。 名親との交換で金と快 楽を手に約束。		騙し、悪への誘惑。		大通り	金貨 Gold			男 (名親)						
55 Rumpelstilzchen						小人の名前、 木質を知る。																
81 Bruder Lustig		ひどい足						人を殺す。 輪舞、暴行する。			横殺さる。1人は 地獄へ逃げる 地獄に親分がいる。		お城	地獄		親分	男 der Torwächter	Teufelgespenster, die Geister				
82 De Spielhansl		曲がった背 真っ直ぐな背			年寄りと 若者			親分は賭博をする。			地獄に親分の王様。 若いのは人間界で 働く。		地獄	地獄		王様	男のよう。					
100 Des Teufels rußiger Bruder			小さない人		老人 der alte Teufel			7年間の従僕との交換 で金を持ちに。	不潔、音楽、 涙を嫌う。		ごみ屑を純金に。 泥地を潤す。音楽、 恐怖の対象。	森	地獄	金 Gold und 純金 pures Gold			男					
101 Der Bärenhäuter		縁の上着。 黒い馬の足。 堂々としていた stattlich				困難を知る。		恐れぬ勇氣と交換に金 と金を。	不潔。	轟音と共に出現。 弓の祈りを禁じ。 7年間の忍足。		荒野		金と財宝 Gold und Gut		男 ein unbekannter Mann						
120 Die drei Handwerksburschen		豪華な身なり。 人の足と馬の足。						契約し、金と仕事を。 赤馬の馬車で、火花を 散らし現れる。		殺人犯の魂を奪う。 天国は不可。		道 (路上)	金 Geld			男 ein reich gekleideter Mann						
121 Der Königsohn, der sich vor nichts fürchtet			小さい					火を焚き、賭博する。 暴行する。 人を殺そうとする。	賭博	夜中に姿を消す。 恐怖の対象。		夜中に城に				まず男	der Teufelspuk					
125 Der Teufel und seine Großmutter		火竜 (空を飛ぶ)						魂を奪い、地獄へ連行 と言う。(魂を奪う) 契約で、豊かな生活を。 7年間。		誰を解けば、白山 の身に。	酒	空から穀物 煙に。	森の中の岩 小屋、 地獄へ連行 と言う。	金 Geld の出る様。闇 魔帳(Buch)	お婆さん		男のよう	ein feuriger Drache				
148 Des Herrn und des Teufels Götter					若干懶か	人へ金を与える。神に 船價金を要求。		山羊の姿にな ること。		山羊の燃れる。 山と対決する。 Geld 要求。						男のよう						
189 Der Bauer und der Teufel			小さい	黒		領馬。	農作物を買う取引をす る。					烟の燃える 石炭の山。	岩穴の中	大金 Geld, 宝物 Schatz			男のよう					
195 Der Grabhügel		赤い羽根。 黒の足。 Leibhaftig		黒		領馬。	墓中の物 (悪人の魂) を抜けて行く。	陽の光を嫌う。		直夜中につんづく 音をたてて現れる。 曙光と共に叫んで 逃げ出す。		墓		金貨 Gold,		男	Herr mit der roten Feder, der Schwarze, der Unhold, der böse Geist, Kohlebrenner, Schornsteinfeger	得体の短い物、不気 味な物のこと。 得体の短い物 恐ろしい怪物				
59 Der Frieder und das Katherlieschen																						
61 Das Bürle																						
119 Die sieben Schwaben																						
Der Schmied und der Teufel		白い髪。			年寄り	領馬。					闇魔帳に名を書け ば 10 年 (金) をさせる。人に 変身。地獄を治め る。神と分業。		森	地獄	闇魔帳 (Buch)出ら れぬ皮袋。 金貨 Dukaten		子分	男 ein Mann				
68 De Gaudef un sien Meester						変身の術を見 破る。																
92 Der König vom goldenen Berg			(小さない人)	(黒)			(家で脚に当たる物を 12 年後にもらう条件 で、金をやる。)	(輪)	(話し合いの解決 をする。)		(煙)		人金 Geld		(男)	der Schwarze	怪奇現象を Teufel の せいにしている。					

『日本の昔ばなし』の鬼

	類	風貌	背丈	色	年齢	知識	性格	振舞い	服装	好み	特徴	食べ物	飲み物	出会う所	すみか	持ち物	家族	仲間	性別	別称	囁え、比喩
地蔵淨土 I 83		鳥の穴					少し頼馬	博奕を打つ。 欲強く、命を殴打。	博奕	夜明、鬼の真似で逃げる。	鼠の穴の中	鼠の穴	金(銭)			男(俺)					
牛方と山姥 I 155	光る目	髪の毛を振り乱す	年寄(鬼婆)				頼馬	牛方に食おうとする。 熱湯で殺される。	鼠嫌い	口唇。編され枯木から落つ	村入口の竹藪	山だろう		若い女(娘)		女	鬼婆、山姥				
飯くわぬ女 I 162				若そう				物を食ふぬ。人がしかし食う。よもぎと菖蒲で殺り死ぬ。		よもぎと菖蒲が嫌い。	頭の真中からにぎりと餃を食べる。		男の家				女	鬼女			
桃太郎 II 12	大きな目	小さいのも	赤、黒					涙を流し、命乞いをす る。悪いことをする。				酒	鬼が島	山奥の鬼が島	宝物	大将は鬼	男(大将)				
百合若大臣 II 33								米粒を丸呑みする。									男				
鬼の妹 II 58		牙						牛の血を吸う。 人を食べる。馬を食う。 虎に噛み殺される。		妹に化ける。 恐怖の対象。			家(島=故郷=村)					女?			
鬼が笑う II 63							少し頼馬。	人間をさういとと言う。 子供出でぬい。 人間と交わる。		黒い巫女嫁を渡す。 川の水を飲み下す。		酒	村の井を越えた所	川向こうの鬼屋敷	万里中、下里中、人數だけ咲く花。	家来番人	男				
夢見小僧 II 87							頼馬。	看切りにしろと言う。 人を食う。					海の鬼が島		千里桜、生き桜、慈耳	大将	男(大将)				
べに皿かけ皿 II 141			赤、青					人を食う。 廻ったては食わぬ。		笛を吹く。			山中の家	山中の家	笠みの小箱	母の婆さん	男(兄貴)				
鬼のむこ II 151	角、足						少し頼馬。	川を渡つから、娘をよこせ。急流で、死ぬ。 人間と交わる。					小川の側				男				
三枚のお札 II 156	口	裸足になって追いかけ		年寄りそう				人を食う。 おはくを付ける。		大小に変身。 蝶になる。			山中	山中の家			女	鬼婆			
・寸法師 II 22	目							娘を廻まえようとする。 丸呑み。					蝶音様語り	の帰り道	打出の小槌		男				
五分次郎 III 25			赤、白				少し頼馬。	靴の稽古をする。 飲み込む。					鬼が島	鬼が島	宝物	頭目	男(戦、頭)				
笛吹蟹 III 57		酔って角と牙を出す。						雨風吹かし家を壊す。 妻を流す。 天上の鷦に殺される。 人間と交わるよう。		酔て角と牙を出	葉子	酒	雲の切れ日 の門の裏 太鼓が狼煙代わり。	鬼が島	百里中 と鬼が島	翁と婆 大将、下戸鬼	男				
鬼と三人の子ども III 81	足	戻人								夜帰ってくる。			山中の家	山中の家	千里粋	婆さん	男(俺)				
大工と鬼六 III 117		大きい						日干との交換で、橋を架ける。		名を当てると、日 玉要求を引っ込め、 姿を消す。			水中から	山中? 川の中?			男(俺)				
南島のさるかに III 152																					
手なし娘 I 25																					
立市貴い III 46																					
蚤蚊の起源 I の 366								叫き殺され、糞汁が蛭、 血が虫、灰が蠍となる。						天から降りる							
蚤蚊の起源の諸類話 366								内が蚊、灰が蠍、蚊、 筋が蛭に。死んでも人を食うたま。 娘を渡い、父わる。									男				
「ガモウ」に食わすぞの類話 386								子を渡す。										男のよう (言葉)			
馬の子戯 2 の 284								焚火にあたる。 剥身にして食うと言う。 ユタの尻、皮で動けぬ。 死に裸で殺される。					山中		生き櫻、 死に櫻	打出の小槌					
馬の子戯 288														天上の鬼が島							
ほっこ食い娘 2 の 294								東の面。 人食いと勘違いされる。									女	女鬼(鬼の面に過ぎず)	鬼の面を被っている		
毘沙門さまの授かり子 3 の 31								人食い。 変化もんと驚き逃げる。				酒	川下の鬼が島	打出の小槌	男(言葉)						
類話・長崎(・寸法師・翠入り草) 33								相撲をとる。丸呑み。						舟の鬼が島	万里中と打出の小槌						
類話・福岡 33			赤、青					丸呑み。					御殿の外		打出の小槌						

	顔	風貌	骨丈	色	年齢	知識	性格	振舞い	服装	好み	特徴	食べ物	飲み物	出会う所	すみか	持ち物	家族	仲間	性別	別称	警え、比喩
類話・岡山 34				赤、黒				相撲。五分次郎を恐がり逃げる。		夜。				鬼の家	打出の小槌		男(相撲)				
類話・岡山 34														清水坂	打出の小槌						
類話・鳥取 34				赤、青				丸呑み						八幡様の途上	打出の小槌						
類話・新潟 35								丸呑み						觀音様の途上	打出の小槌						
類話・埼玉 35														花見の時							
類話・福島 36								日を次かれ逃げる						清水般音	打出の小槌						
類話・福島 36														花見の時	打出の小槌						
一寸法師の類話・埼玉 38								丸呑み						觀音様	打出の小槌						
一寸法師の類話・埼玉 38				赤				丸呑み							打出の小槌						
一寸法師の類話・埼玉 39								丸呑み						宮参り	打出の小槌						
一寸法師の類話・埼玉 39								丸呑み						清水、山奥	打出の小槌						
親指太郎の類話・鹿児島 41					5人子の親			山中の家の主人が鬼になる。		夜。				山中の家	山中の家	宝物、宝物		男			
手の息子 44		手、首		大人				人食い。人を蒸し、食うと言う。		立く。				海の鬼が島	海の鬼が島	宝物	頭	男のよう		鬼が鬼殺しを鬼と言う	
桃の子太郎 II-16・桃太郎の類話 69		赤、黒								派はほろと泣く。				川向うの鬼島	川向うの鬼島	宝物	大将	男のよう			
桃太郎の類話・鹿児島 72	大目							人食い。						野の地下の島	野の地下の島	宝物					
桃太郎の類話・佐賀県 73														大江山の鬼島	大江山の鬼島	宝物					
桃太郎の類話・岡山県 76	目		大人								酒				鬼の生肝が菜	酒呑童子が菜	大将	男			
桃太郎の類話・鳥取県 77		赤、青												鬼が島	鬼が島	宝物					
桃太郎の類話・石川県 79	牙														鬼が島	鬼が島	大判小判、隠れ蓑、隠れ笠、打出小槌	大将	男のよう		
桃太郎の類話・新潟県 79																					
桃太郎の類話・岩手県 83								地獄から忝田子を所望、食う。						地獄	地獄			男のよう			
瓜姫と天邪鬼の類話・新潟県 108								餅、人を食う。						家	山?			女	山姥=鬼婆		
瓜姫と天邪鬼の類話・岩手県 117								釜で殺される。						家				女			
夢見長者の類話・福島県 228		赤、青、黒				領馬。								海の島							
夢見長者の類話・岩手 229								海水を飲み、舟を引き寄せる。						海の島	海の島	千手車、万葉車、生き針、死に針					
生き糠死に梗 330			大人			領馬。		人食い。殺される。						酒	海の鬼の島	海の鬼の島	小き梗、大き梗、海び笠、海び足、鬼脚と足、酒ちやま、ひちやま	頭	男(日那)		
二人兄弟 4 の 50						大人									奥山の家	奥山の見事な家	生き糠	女	男のよう		
二人兄弟 54	光る日玉							人食い。告段しにされる。						貞夜中。	村						
地藏淨土・類話・山形県 78			大人			少し領馬	博打。餅を食う。		博打		鬼の声で逃げる。耳が敏い。				上間の鶴穴		裁		男のよう		
地藏淨土・類話・鹿児島県 83			大人			少し領馬	酒盛り。実子を食う。				夜。			酒盛り	山の神屋(社)	金の道具、金の椀			男のよう		
地藏淨土・類話・鹿児島県 84	胸の出(出晴)	赤、青				少し領馬	博打。入食い。		博打		鬼の羽音で逃げる。				畔の宮		財布		男のよう		
地藏淨土・類話・大分県 85								隕の爺を殺す。							穴の中	穴の中	錢				
地藏淨土・類話・熊本県 86						少し領馬	踊る。隕の爺を叩く。				鬼の鳴き声で逃げる。				山の地藏寺		宝物				
地藏淨土・類話・熊本県 86						少し領馬	隕はの実の娘を連れ去る。				夜。隕の鳴き声で逃げる。				山の地藏室		大判小判				
地藏淨土・類話・長崎県 86			大人					鎧を飯炊きにする。							山の鬼の家	山の鬼の家	宝物		男のよう		

	顔	風貌	背丈	色	年齢	知識	性格	振舞い	服装	好み	特徴	食べ物	飲み物	出会う所	すみか	持ち物	家族	仲間	性別	別称	覚え、比喩
地蔵淨土：類話・長崎県 87					大人			爺を飯炊きにする。 婆を食ふ。			方当をもらひ、爺を許す。			山の鬼の家	山の鬼の家	宝物		男のよう			
地蔵淨土：類話・佐賀県 88							少し頼馬	爺の皮を剥ぐ。			後。鶴の羽首で逃げる。			山中の家		鎧と宝物		男（俺達）			
地蔵淨土：類話・福岡県 89			赤、青				少し頼馬	繼母の夫を食う。			夜。鶴の鳴き真似で逃走。					打田の小雉、 藏の鍵					
地蔵淨土：類話・高知県 89			赤				少し頼馬	一粒米を約子で一杯にする。 隔の爺を穴に放り込む。			晝り飯を探す間に約子を取られる。			山中の穴	山中の穴	(不思議の) 約子					
地蔵淨土：類話・広島県 90			赤、青	大人			少し頼馬	隔の爺を酒者に連行。人食い。			筋真似で逃げる。			広い原野			盗んだ金。				
地蔵淨土：類話・広島県 91					大人			一粒米を余の箸で一杯にする。婆を飯炊きに、隔の婆を飲む。			留守中金の箸を盗まれる。			鼠の穴の鬼の穴	鼠の穴の鬼の穴	一粒米を一杯にする金の箸		男のよう			
地蔵淨土：類話・広島県 91							少し頼馬	隔の爺を地獄へ連行。			鶴の真似で逃げる。			穴の中		打掛の金棒					
地蔵淨土：類話・広島県 91			赤、青、 白	大人				婆を飯炊きにする。赤米、青米、白米一杯を約子で混ぜて作り。隔の婆を殴る。			留守中婆に赤青白の米粒と約子を盗まれる。			穴の中	穴の中	赤、青、白米と約子		男のよう			
地蔵淨土：類話・広島県 92								餅を食べた鬼は婆に粥を枕く。 隔の婆を打ち逃す。			粥を炊く器を取りに行った時、金の約子を盗まれる。			地獄の底	地獄の底	金の約子（單なる黄金）		男（わし）			
地蔵淨土：類話・岡山県 92			赤、青	大人のよう				利口をとる。晝り飯を食ったので余の約子をやる。						穴の中	穴の中	打出の金の約子		男（相撲）			
地蔵淨土：類話・岡山県 92					大人のよう			团子を作らせ、飯炊きに。			川を飲み干す。 婆に盗まる。			山中	鬼の家	約子（序）と米		男			
地蔵淨土：類話・新潟県 95							少し頼馬	歌留多。		「かまいたち」	かまいたちを一番恐がる。			一軒家		宝物					
地蔵淨土：類話・新潟県 97					大人のよう			宝物の充實。隔の若者の性根を叩き直し、正直者にする。			鶴の羽首で逃げる。			穴の中	鶴の祖先の穴	宝物、金銀					
地蔵淨土：類話・埼玉県 100								团子と釜を交換する。						山の穴	山の穴	米が一杯になる釜					
地蔵淨土：類話・埼玉県 100								賭博。「鎌倉の海老」と言った隔の爺を食う。	博打		後。「鎌倉の權五郎」と言うと金を盗まれ逃げる。			空家	金（かね）		男のよう				
地蔵淨土：類話・福島県 101			赤、青	大人のよう				地蔵に代り团子のお札で衣物を盗む。 夜は盗り爺を懲らしめる。			地蔵の使いをする。			爺の家		宝物					
地蔵淨土：類話・福島県 103					大人のよう			隔の爺を叩く。		雷、雨を嫌う。後。屁・小便で雷・雨だと言い、逃げる。			家		金		男のよう				
地蔵淨土：類話・青森県 112					大人			隔の爺を血みどろに。	博打	「かけろ」虫だと逃げる。			山の地蔵堂		金と銭	小鬼も					
地蔵淨土：類話・青森県 113	角		赤、青、 黒					隔の爺を角でさし、咬みつ、血だけに。						土間（にわ）の鼠穴							
瘤取爺：類話・新潟県 267					大人のよう			酒呑り。踊りを喜び、明日の相保に娘を取る。 隔の爺に娘を付ける。				酒	山中（音とり）								
瘤取爺：類話・埼玉県 267			赤、青					踊る。相保に娘を取る。 宿付け。						山中の穴	山中の穴						
瘤取爺：類話・福島県 268					大人のよう			酒呑り。踊り相保瘤取り。 宿付け。				酒	木陰雨宿り時								
瘤取爺：類話・宮城県 269								百日参りで瘤取り。 悪者に宿付。			鬼は「神様の使い」										
瘤取爺：類話・宮城県 269											鬼は神の命を受け、瘤取り			杉の木の洞							
瘤取爺：類話・岩手県 270								舞。晝り飯で瘤取り。 隔の爺付。			後。瀧原の夜鬼来る。										
瘤取爺：類話・岩手県 270	大鬼、小鬼	大、小						舞。担当に瘤取り。 隔の爺付。			後。夜明けに去る。			山の神の室							
瘤取爺：類話・岩手県 270					大人のよう			酒呑り。宿を通り、瘤取りをする。隔の爺に3、4瘤を付ける。			後。夜明けに去る。	酒	山の木の洞		宝物						
猿地蔵：類話・鹿児島県 275					大人のよう			人体の部分を載せてもらひ、轢走黄金、宝物をやる。真似男を食う					阿楂の葉のある所	黄金、宝物							

	顔	風貌	背丈	色	年齢	知識	性格	振舞い	服装	好み	特徴	食べ物	飲み物	出会う所	すみか	持ち物	家族	仲間	性別	別称	備え、比喩
猿地魔：類話・青森県 288					大人のよう		少し頗馬	博打	馬の鳴き声で逃げる。					川のこうの猿の宿	猿が鉄をくれる。						
米福稟福：類話・静岡県 5 の 90							人食いのよう。			夜。			山	山中の家	婆が米と米をくれる。						
米福稟福：類話・山形県 99													山	山の鬼の家	婆が宝箱を委ぐれる。						
米福稟福：類話・岩手県 102							人食いのよう。			夜。			山	山の鬼の宿	山姥が蔓蘿をくれる。(鬼と別)						
栗拾い 210				大人			人食いのよう。			夜。			山	山中の家	婆が米箱をくれる。(=婆)		男				
栗拾い：類話・和歌山県 219							人食い。			夜。繼子に同情し種をやる。				山中の老嫗の家	鉢の出る鉢(婆(老嫗))						
栗拾い：類話・長野県 222							人食い。			夜。			山	山の鬼の宿	婆が連れ養(婆と隠れ笠をくれる)。						
味噌になった婆(鬼を一口) 6 の 154			大人				人食い。(人骨多)。味噌に変身。			夜。鬼は食べられる。			山	山中の一軒家			女	鬼婆。			
味噌になった婆：類話・富山県 156			赤				人食い。			女に変身。			山寺								
鬼婆に耳から食われた話 157			鬼婆				子供、塵に変身。			鬼は食べられる。			山中				女	鬼婆。			
馬子と鬼婆(牛方山姥) 158	大目玉	口が耳まで裂け、赤舌銀の針金のような髪					餅を焼く。人食い。(多くの人骨、馬の骨)			日暮れ。			鰐				女	鬼婆。	実は押。		
馬子と鬼婆：類話・鹿児島県 161										菖蒲嫌い。											
馬子と鬼婆：類話・鹿児島県 161		男の子の鬼。		男の子			焚かれて種々の虫になる。							鬼の家			家の主様				
馬子と鬼婆：類話・山梨県 171										餅を食う。				鬼の家							
馬子と鬼婆：類話・新潟県 172										鬼嫌い。											
馬子と鬼婆：類話・新潟県 173										沼の水鏡に飛り込む。餅、甘酒を飲む。			山村				女	鬼婆			
馬子と鬼婆：類話・新潟県 173										餅を焼く。甘酒、熱湯で殺される。								女	鬼婆		
馬子と鬼婆：類話・新潟県 173										餅、甘酒。煮殺される。				山の鬼婆の家	金(かね)。		女	鬼婆			
馬子と鬼婆：類話・新潟県 174										餅、酒、甘酒。				鬼婆の家	金(かね)。		女	鬼婆			
馬子と鬼婆：類話・福島県 176										熱湯で殺される。								鬼婆	鬼婆は蜥蜴。		
馬子と鬼婆：類話・福島県 176	角。									餅、甘酒。				火の神に従う。				女	鬼婆		
馬子と鬼婆：類話・青森県 180	童の鬼婆。			鬼婆			餅を焼く。熱湯で殺される。			火の神に従う。			山の童		女房		女	鬼婆	童が鬼婆に。山蜘蛛。		
食わず女房：飯食わぬ女類話 182				大人						鬼婆は山蜘蛛。											
食わず女房：類話・長崎県 189	大口			大人						頭から飯を食う。飛ぶ。	蓬、菖蒲嫌い。		山	山へ。							股木が蝶に変身。
食わず女房：類話・愛媛県 192				大人						大人は飯食い。				火の神に従う。				女		蝶が鬼に。	
食わず女房：類話・長野県 206				大人						家から出される。				子供と会いに来てと云う。				女		女は酒呑童子の鬼。	
食わず女房：類話・山梨県 207				大人						頭から飯を食う。			家	山へ。				女			
食わず女房：類話・富山県 209				大人						頭から飯を食う。				蓬と菖蒲嫌い。				女			
食わず女房：類話・宮城県 218				大人						頭から飯を食う。			家	鬼が島へ帰る。			女	鬼と人間の半の男子			
食わず女房：類話・岩手県 222				大人						頭から飯を食う。川に落ち死ぬ。			蓬と菖蒲嫌い。				女	鬼婆			
鬼と三人兄弟：類話・鹿児島県 229														蓬と菖蒲嫌い。							
鬼と三人兄弟：類話・鹿児島県 229	背に瘤。			大人						蓬と菖蒲嫌い。				蓬と菖蒲で座頭になる。							
鬼と三人兄弟：類話・鹿児島県 229										蓬と菖蒲嫌い。											

	顔	風貌	背丈	色	年齢	知識	性格	振舞い	服装	好み	特徴	食べ物	飲み物	会う所	すみか	持ち物	家族	仲間	性別	別称	備え、比較
鬼と三人兄弟：類話・鹿児島県 229		下からなでると腹がさらさら。		大人			少し頼馬	母を食い、母に化ける。池を飲み干す。竹を纏て死ぬ。			編され、木から落卜、頭を削る。		家								
鬼と三人兄弟：類話・鹿児島県 231		乳に牡蠣がついている		大人			少し頼馬	母を食い化ける。人食い。灰綿で死ぬ。池を飲み干す。踊る。					家								
鬼と三人兄弟：類話・鹿児島県 231				大人			少し頼馬	母のぬの皮を剥き母に化ける。味を食べる。蘭れ縄で死ぬ。					家								
鬼と三人兄弟：類話・福岡県 237		黒い手		大人				母を食い化ける。灰綿で死ぬ。						家							
鬼と三人兄弟：類話・奈良県 243		手に毛、どら声		鬼婆				赤子を食う。蘭れ縄で死ぬ。						家			女	鬼婆			
鬼の子小綱 253				大人				立派な鬼に化ける。姉を食う。人食い。川を飲み干す。鬼打ち木を恐れる。		夜。蓮の葉の露で来客判断。			家に。	蒼の夫の大きな家。村の他家の近所。人川あり。	蓮の葉の露。落ちて来る人判別。殺め。半鬼半人種了。鬼。鬼の子。殺せと言う。	子鬼	男				
鬼の子小綱：類話・鹿児島県 257				大人				姉を食う。海水を飲む。殺さる。					家	鬼の家、海	死に種。鬼人子（自殺）		男				
鬼の子小綱：類話・長崎県 258				大人				人を食いそう。人を差しする。				酒	鬼の岩屋	鬼の岩屋金（かね？）。	人の女房		男				
鬼の子小綱：類話・広島県 258				大人				姉を食う。人食いのよう。殺さる。		白花は男、赤花は女と判断		酒	村か人家？	山奥	白、赤花で来人判別。		男				
鬼の子小綱：類話・長野県 259				大人				姉を食う。人食い。海水を飲む。ほの川叫きで笑い、海水を吐く。					山奥		半鬼半人の子（15、16歳）	男					
鬼の子小綱：類話・富山県 260				大人				人食い。武士に化ける。					山。	鬼が島、水、舟。	鬼人子（氏神）		男		酒酔童子		
鬼の子小綱：類話・新潟県 260				大人			少し頼馬	姉を連行。食い比べ。人食い。仕事に行く。川を飲む。		母の尻をくり、杓子の叫き声で笑い、水を吐く。			山の立派な家。川		鬼との子（3、6歳）		男				
鬼の子小綱：類話・新潟県 261				大人			少し頼馬	姉、竹の子の食い合い、姉ない競争。雄打。糞分を恐れ逃げる。				烟	鬼の家	片角子瀧（鬼人子）		男					
鬼の子小綱：類話・新潟県 261				大人				豆の食い比べ。		子の尻をくりで噴出す。その息で姉、姉子幼る。		酒	山	山の鬼の家。万両舟	鬼と人の子は姿を消す。	男					
鬼の子小綱：類話・秋田県 264（參）								人食い。（この夫兰は大か！？）		板で来客判別。		酒	山	天竺の門	桜で来人判別。						
鬼の子小綱：類話・宮城県 264				大人				あんご餅で女房を渡す。人食いのよう。鬼子は死後錢になる。		鬼子の死体の細切れ串刺で家に入れるね。日本に石を投げらるる詠歌。		酒		鬼が島の鬼の家。海の島？	右半が鬼、左半が人の子死ぬ。	男					
鬼の子小綱：類話・宮城県 265	大鬼	大	大人		少し頼馬			姉を渡す。	煎り豆好み	鬼の尻の尻叩で海水を吐す。		酒	山	鬼が島。海	鬼入子、鬼へ	男					
鬼の子小綱：類話・宮城県 265				大人				姉をやり姉を嫁にする。人食いのよう。鬼子は死後錢になる。				山	近くに川がある。	鬼と人の子。		男					
鬼の子小綱：類話・鹿児島県 270								姉痴渡り。人の刺身食い。殺さる。		月のつくものを人に食わす。		酒	鬼の島	墨石下の穴（島）	婆とその子鬼。	男					
鬼の子小綱：類話・山梨県 271								人食い。高駄。					山の家	山の家	千里の靴。婆。		男のよう				
鬼と豆の食いくら 272			大人		少し頼馬			娘に惚れる。豆の食い比べ。姉に挑戦する。娘を添める。					家	山			男				
鬼と豆の食いくら：類話・鹿児島県 274					少し頼馬	川へ食う。		弘法様の家末	駆され、曲木で飛ばされる。												
鬼と豆の食いくら：類話・秋田県 275				大人		少し頼馬	娘を渡す。人食い。		坂叩きで人工の川水を吐く。				天上の鬼御殿	千里車	鬼と人の子。	男					
鬼と豆の食いくら：類話・宮城県 275				大人		少し頼馬	娘を渡す。人食い。		芦蒲と茎を避ける。花火で米谷判断。				山	山中の鬼の家			男				
鬼と豆の食いくら：類話・岩手県 275			大人		少し頼馬			娘を渡す。人食い。風呂水汲み、煎り豆食い、湯飲み競争。		湯飲み競争の熱湯で死ぬ。							男				

題	風貌	性	年齢	知識	性格	振舞い	服裝	好み	特徴	食べ物	飲み物	出会う所	すみか	持ち物	家族	仲間	性別	別称	號え、比喩
鬼と豆の食いくら：類話・岩手県 276			黒、青、大人赤			穂を渡う。人食い。飯、煎り豆食い。木伐り比べ。斬り殺される。						山	鬼の館（黒、青、木門）		家来	男			
鬼の箱：類話・鹿児島県 280	目					人食い。根を掘り人食い。山は虫。斬り殺される。		灰。				家				女（妹）			
大工と鬼六：類話・岩手県 7 の 96			大人			目に貰う約束で櫛を		名前當てで目を放棄、姿消す。				川水の泡から				男（鬼六）			
目一つ五郎 112	一つ目 大男、白い炎の目	大			少し朝馬	人食い。糞を目に刺される。						山間の林	山の崖の洞穴			男（五郎）			
ツキナウシナ 229	狼脣。		大人			人の刺身食い。巣の卵を獲り殺される。			力のでる食物をやる。鬼の城の穴の別の縄から巣葉。			村	巣中の巣石下の鬼の城（鬼の島）	婆（人間で鬼の妻）7人の子		男			
鬼姫 235	大小変身	大、小				人食い。洞に投げ捨てられる。						山				言葉から男？			
百合若大臣：類話・長崎県 339			大人			娘が盗む。風袋で舟を追い返す。		目性比べで涙を流す。殺さる。				鬼が島（石門）船			小鬼他多数	男			
火車の化物：類話・鹿児島県 346			大人		少し朝馬	母を渡いに来る。娘を渡う。人食い。射殺、斬殺される。		人を飲み込む時、羽釜で歯齒を碎く。			家	平石の下の穴	黄金箱	頭鬼、家来	男				
姑の毒殺 8 の 285																悪人を鬼と言う	嫁いびりの姑のこと		
つんぽとめくら 371	2本の角、血が流れる。		大人			木から落ちた人で、大将軍の角を折られ、逃げる。						山の岩山の穴の鬼の岩屋	金銀珊瑚、隠れ裏、虎の毛見（へこ）	大将他4~50匹	男のよう				
閻魔の失敗 385			大人のよう			死者を剣の山、熱湯に連れて行く。死者を飲む。閻魔も飲む。		閻魔様の手。くすぐり。笑い怒りの筋を引かれ、騒動。			地獄	三途の川の辻上、地獄		閻魔	男のよう				
笛とかさや：類話・岩手県 9 の 25						笛の家の番をする。						雲の上	雲の上の笛の家						
通りものの運命 10 の 176	角。					笛師を食べる。（笑話）		鬼が人に飲まれる。（笑話）			村はずれ								
おっかなくて、おかしくて、悲しい話 181						子供を食う。子供を渡う。		人足をひり、死ぬ。（笑話）			里。								
翼の鬼退治 241	牙、爪		大人			大工に化ける。鬼となり蝶を渡う。人食いのよう。		丁分鬼は射殺される。丁分鬼は斬首。斬首死なす。			酒	村の家	山奥。門。	親分鬼他多数。白人。	男（大工）				
蛇姫 268												天	天。						
鬼の橋 307				大人（若い）		若い女が鬼に変身。三吉の弟に化げ、三吉の舌を食い切る。					村の橋。			女					
鬼婆さの仲人 311				鬼婆		人食い。						山の家。	山中。		女	鬼婆。			